

賀  
茂  
季  
鷹  
遺  
文  
集

高  
橋  
貞  
一

## 賀茂季鷹略歴

賀茂季鷹は上賀茂神社の社家の人である。上賀茂神社藏の賀茂系圖によれば、

明和二年六十九爲有栖川宮六位侍叙從六位下任左兵衛大尉同六廿五辭官位更候諸大夫叙六位下任美作介同三年八廿任備前守同七年三廿九辭有栖川宮諸大夫官位給御暇天保十二年十九卒年八十八于時一老

とある。明和六年十月二十二日有栖川宮職仁親王の薨去によつて御暇を賜はつたのが七年三月二十九日であつたことがわかる。この年季鷹は十七歳である。彼の著である、富士日記の巻頭の語に、

明和九年正月十九歳にて始て下りし時季鷹 今日も亦ふじの裾野に暮にけりあすもかくてや草枕せむ すべて五度ばかり登り下りに見しに又をとゝし下りし時 東路の往還毎に富士の根は見之眼耳毛似ず驚かれ筒

とあつて、十九歳の春江戸に下つたのである。季鷹の江戸へ行つた理由は明らかでないが、季鷹の家、山本氏は社家の間では主要な地位をしめるものではなく、上賀茂神社に仕へてゐても他に仕出して生活の資を求める境遇であつたと思はれる。と同時に有栖川宮職仁親王は靈元天皇の皇子で、父天皇の和歌の道を繼いだ方で、季鷹も職仁親王の感化をうけて歌道にはげんだと思はれる。親王の薨去は季鷹に境遇の轉換を餘儀なくさせ、親王の歌の門人三島自寛などの

すすめによつて江戸に下つたのであらうか。雲錦集卷四に、「はるかなるゆかりもとめてと…」ある。明和六年十月三十日賀茂眞淵は歿して居り、江戸の國學は、加藤千蔭や村田春海など眞淵門下の人々に移つてゐたので、季鷹が誰を師としたか明らかでない。季鷹の藏書の書入れなどに師を表すべき記載がない。僅に慶長古活字版の奥書に、

此一帖以山明阿校本一校畢安永二年九月賀茂季鷹

とあり、押紙二葉の中に、

明阿師曰竹の内に人の有し事は西天の書にもさまぐみえたり其下にしるしつく正文は別記此に略……

とあるによつて、山岡明阿に就いたことがあつたのであらうか。加藤千蔭の門人とした國學者の系統圖があるが、千蔭を師として學んだといふ記載は未見である。唐物語（季鷹舊藏寫）の奥に、

一とせ幘庫といふ藏書印おし和漢の書多く世に出き此唐物語もそれがうち也内藤本ともいふめり江戸に侍りしをりにて西行上人の親筆をはからずえて橘千蔭と、もに一わたりよみあはせて西上人のことなる千蔭朱すみもてかたへにしるしつけ侍る也

寛政五年秋七月賀茂季鷹

とあり、天明八年九月寫、第三源氏物語竟宴歌（自筆本）に、「こはいにし天明六年の春の比より千蔭ぬしの家にやさきせ子などつどへて講じはべりしが此比をへ侍りし竟宴なり」とあ

って、朋友の如き書きぶりである。

江戸では、富士日記によると龜島といふ所に寓居した。そして加藤千蔭門下の人々や多くの學者に交つたと思はれる。「安永五年十一月賀茂季鷹」の刊語のある伊勢物語傍注、正誤假名遣（天明八年六月季鷹の凡例あり）、萬葉類句三卷などが江戸遊學中の業績である。萬葉類句は、文化二年九月に季鷹の凡例があり、その中に、

此書季鷹が江戸に在しをり撰出せし初よりたすけなせるは三島自寛武田有之源躬弦をはじめ源正賢あるは下總國なる橋本節之などこれ彼のいさをゝもてはやう案は書おきたれとかにくにさはらふ事うちつゞきて今までにはなれる也

とあるによつて季鷹の親しかつた人がわかる。

父季榮の病氣によつて歸洛したのは、寛政三年であつた。富士日記の跋に、

弱冠遊于江戸留十九年以善和歌有名于世矣寛政壬子予訪象田禪師於天龍之壽寧精舍坐有一客禪師謂予曰之人以和歌遊于江戸頃日還京師予雖未詳姓名而心知爲縣主也旣而問之果然爾後交驩情誼日熟于今二十餘年猶一日也

とあり、この記事は寛政四年であるので寛政三年の歸洛であらう。季鷹の歸洛を語るものに、琴後集卷六、雜歌に、村田春海が、

賀茂季鷹が父のこゝちわづらふと聞きてとく都へのぼるにわかとて、あふぎに添へて、ゆき／＼てはやくあふぎの風しあれば身のあつしさも君や忘れむ

と詠み、又「かりの行かひ」の中に、「季鷹縣主の賀茂に歸り給はんとて、千蔭ぬしへおくりしふみのこたへ」といふ文があり、

さるはかむな月ばかりこの東路立はなれたまひてみやこへかへりのぼりたまはむよ

とあり、寛政三年十月頃の歸洛であろう。「出雲物語」の奥書には、

寛政四年子七月十三日夜於社頭一覽畢賀茂季鷹

とあるによつて、寛政四年は上賀茂神社に奉仕してゐたことが明らかである。明和九年正月より寛政三年十月まで約十九年間、十九歳より三十八歳まで江戸にあつたのである。それ以後は、京都に居住したのであるが、季鷹の父、季榮の歿したのは寛政五年七月十二日、六十四歳であつた。西賀茂墓地の石碑の正面に、「故筑前守正四位下賀茂縣主季榮之墓」とあり、側面に、「寛政五年癸丑七月十二日卒六十四歳」とある。平安人物志、文化十年癸酉十月再板本に、

加茂季鷹號雲錦又號生山 山本安房守

上加茂

とあり、文政五年壬午孟秋成刻本によると、

賀茂季鷹號雲錦上加茂

儒居御幸町二條北

山本安房守

とあり、平安人物志、文政十三年寅初冬再刻本には、

賀茂季鷹上賀茂

號雲錦

山本安房守

天保九年戊戌五月改刻本にも同様にあつて、文政初年には御幸町二條北に儒居したこともあつたのである。

季鷹は雲錦と號し、又生山と號すと平安人物志にあるが、雲錦の號は、

雲錦集卷三に、

芳野龍田の花紅葉を根こじ植ゑて雲錦亭となづけて額を一條關白殿に甲斐守保考縣主もてねがひ侍りけるに則ち書きて給はせけるぞかしこきや其の庵に寛政十三年しはす二十日あまりにうつろひて、

千々の春万の秋も雲と見え錦とまがへ名に負ふ木々

とある雲錦亭にちなんだものである。又雲錦集卷三に、

歌仙堂造り終へて文化八年三月十八日、人々集つて當座の祝言、

花の雲紅葉の錦万代に立ちかさぬべき今日の團居か

とある如く、文化八年に邸内に歌仙堂を營み柿本人麿を祭つた。清輔本古今集下卷（鎌倉時代初期寫）一冊は現に山本家に藏され、九月十六日の日付で、海部屋善三、道幾が山本安房守様宛に祝品として送つた添狀がある。季鷹の藏書印の「歌仙堂」印は後の人のおす所ともいふ。生山は藏書印にも「生山文庫」とあるものがかなり存し、あれやま即ち上賀茂の神山を示したものであらう。

寛政三年歸洛以後、天保十二年十月九日歿するまで上賀茂にあつて、多くの歌を詠み、學者文人と廣く交つたことは周知の通りである。左にその一斑を示すならば、享和元年（一八〇一）三月晦日、海量法師と土佐の今村樂が季鷹の亭を訪ねて贈答の歌のあつたことが、樂の歌集、

花勝間にあることを森銑三氏がはやく近世文藝史研究に述べられた。この年、雲錦集卷三によると、

本居宣長京にのぼりて橋本常亮をあないにて始て我が雲錦亭をとほむとて來たれる時京に出るみちなかにてゆくりなく出であひければ、

千早振賀茂の川浪立ちながらあひ見し君はをしくもあるかな  
とよみ出しけるかへし、

別るれどうれしくもあかるとばかりに二見の浦の名をやたのまむ

とあり、宣長の石上稿下に、

賀茂季鷹許より、みやびたる君にもあるかな禮ならばひなにとへてふ古言やこれとよみておくりけるかへし、

いせならば五十鈴の川のかみのころばかりはとはこたへむ

とあり、鈴屋集卷八にも同様なことが見える（全集卷十五）。

本居宣長との交渉もあつた。この年九月宣長は歿したのである。

加藤千蔭のうけらが花卷六雜歌に、

富小路三位貞直卿おのれが著はせる萬葉集略解を得まほしとのたまへるよしを、季鷹縣主より聞けるまゝ参らせければ、よろこばせ給ひて御消息のはしに、  
陰あふぐ心のはてもなきぞとはくまなくみえむ武藏野の月

と書きて賜へりければ御返しに、

武藏野のを草が上も雲井よりもらさぬ月の影あふぐかな

とか、

貞直卿より季鷹縣主へ消息におのれがよみ歌のうち二首殊にめでたまへるよしにてみづから書きてまゐらせよとありければ書きてまゐらするとて、

武藏野や花かずならぬうけらさへつまるる世にも逢ひにけるかな

などあり、加藤千蔭など江戸の舊知の人々とも交りが絶えなかつたのである。森銑三著作集卷七、三七頁参照。春海との交渉も同書七〇頁に記すところがある。又「かりの行かひ」によれば、富士谷成章との文通が江戸遊學中にあり、返事二通が「北邊成章家集」に收められてゐる。歸洛の後は富士谷成章の子の御杖と交りがあつた。雲錦集の詞書によれば、小澤蘆庵、書家岡本保考、猪苗代謙宜同謙庭、伴蒿蹊、羽倉信と交り、花月帖によれば山陽の母榎颯季鷹を訪うて歌をよみ、季鷹も二首を詠んでゐる。狩谷掖齋も入洛の時季鷹を訪ねてゐる。季鷹が歸京してからは學者としての勉學はやや衰へ、専ら歌人として生涯を送つたと認むべきである。季鷹の門人には松田直兄と菅原雪臣が有名である。これらの門人も和歌の弟子である。學問の性格はその藏書によつてその方途が明らかにされたとすれば、彼の藏書目録、松田直兄の寫しが田中重太郎博士の許にある。今井似閑の三手文庫奉納目録などと同じく、歌書に重點があつたと認められ、假名草子や俳諧の書は全くない。季鷹の歌についての批判が、田能村竹田全



集、屠赤瑣瑣錄卷六に、

この光彪翁は、小倉藩の世臣にて、秋山庄兵衛といふ人也、歌は春海翁にまなび給へるよし、晩年に京師邸の留守居にて、京師に住れたり、其をりも京師に歌人の宗匠はあまたなれども、大人と稱すべきは季鷹一人也といはれしよし、此も季鷹は千蔭、春海杯と朋友にて、歌よみかはしたる人なれば也。(一〇〇頁)

とある。同書に季鷹の歌が四首見える。

軒ちかき笥の水はおとたえて雪に聲ある ( )

柴の戸に染し千人のから錦君が來て見るけ ( )

(二首卷五)

月をさへ風を宿せるくれ竹のかげならすべき夏さにけり (卷六)

太田南畝とも交り、一話一言の中には季鷹の事が若干見える。卷二十七に、

月影と名をおほせし法勝寺の古瓦を見て、甲斐權守加茂季鷹

古にかはらぬ月の影を見てかつこひかつはあほがざらめや (天明三年頃) (一〇四頁)

卷三十三に、有栖川親王賀茂季鷹贈答狂文がある。季鷹にさせる筒にそへて賜はった狂文に季鷹の答へた狂文で、それいくよあらまたいく世氣味がよやよい君が代は幾世幾とせといふ狂歌も入つてゐて、文化五年頃の作である。季鷹の歌は、雲錦集四冊とみあれの百首が從來代表的歌集として知られてゐる。江戸遊學中は、萬葉集類句などを編み、萬葉集の歌調を學んだ跡が明らかであるが、萬葉調の歌は少く、古今調のものである。城戸千栢の紙魚雜記卷之一上に、

北野奉納百首として、文化十一年二月初の日付で、季鷹の歌が十首収められてゐる。

歲中立春

雪はまだふるとしながく立かへり霞はしらぬ春はきにけり

秋霧

紙屋川平野に通ふ板橋もけさは霧のみ立渡りけり

殘花

諸ともに分來てをしむ人もがな跡はいとはぬ花のしら雪

首夏

花鳥の春の名殘を忘れめや藤山吹はさきのこれども

雪朝遠村

雪にけさ道や絶けん賤が家の煙立そふをちのひとむら

鵜川螢

鵜舟さす瀬々の螢も篝火もやみよゝしとてらす山かげ

鐘聲何方

吹はらふ嵐のつての鐘の音はそこともえこそ定めざりけれ

寄山戀

なげきのみ生そはりけりぬば玉の枕のちりも山とつもれば

夜鶴鳴皋

巢のうちの子や思ふらん水くらき澤邊の田鶴のよはの鳴聲

寄玉戀

玉のごとわが思ふ妹が玉ならばよるひるおちず手にまかましを

これを見ても明らかである。文化十一年には、浦上玉堂の七十賀に歌を獻してゐる。それは雲錦集賀に、

琴を常にもてあそべる玉堂が七十賀に、

行末も稀なることのためしには君が八十代をひくべかりけりとある。

當時小澤芦庵、澄月などが居り、又彼の後には香川景樹が出て、季鷹は芦庵と景樹の中間にあつて、和歌史上にはさ程注目せられないのは残念であるが、一方には狂歌師としても多くの狂歌を残して居て彼の多才を認むべきである。徳和歌後萬載集に、

初春にあがつた飯の多ければ一座は除目驚かしけり

とある。他に少し引けば、傍廂前篇に、

我が耳の遠くなりしは年をへて聞えぬ歌をよみしむくいかな（二六頁）

耳はいと千蔭に見ゆれど芦若の江去舟とや遠ざかるらん（三五頁）

甲子夜話卷五十八に、

大變を太平にする世なほしは家をゆつたり國もゆつたり（三二三頁）

雲錦隨筆卷四に、

賀茂の酸莖は京都の名産也、上賀茂にて製す、大根の形にて蕪也、他所にて種れば通例の蕪となり又他にて漬る時は酸薄し、賀茂にて作りて賀茂にて漬る名産也、季鷹の蜀山人に贈られけるに、

都よりすいなおんなを給はりて吾妻男のさいにこそすれ 蜀山人

とあつて、狂歌の交渉があつたことがわかるのである。季鷹の狂歌扇面に、

紫か周防かないし右近かや此あか染の衛門付たは（鈴鹿三七氏藏）

などもある。松岡行義の後松日記卷之八、天保四年の條に、

五月朔日、早朝一條殿エ參殿、寢殿拜見雨頻ニ降ル。午刻加茂エ參向、西池上田同道、先井關多門宅ニ行ク。暫ク休息。而馬場ニ行、埒ノ外ニ立テ競馬ノ足汰ヲ見ル。先一匹宛馳畢。

其遲速ニヨツテ番ヒヲ定ム。毛付既ニ定テ左右競ヒ爭フ。十番ナリ。雨不止立ヌル、ノ處、

大森彦七が裔孫三郎兵衛ト云モノアリ（割注）、知己ナリ。コノ棧敷ニ屋根アリ。招キ呼ブ

ニヨツテ、其棧敷ニ行ク。季鷹一席、酒肴（大森が所設）、茶菓（季鷹持参）アリ。翁和歌ヲ

詠ズ。各酔興ニ乗ズ。不飲酒者ハ翁ト予ト而已。予モ亦和歌ヲ以テ大森ニ謝ス。

をやみなき雨にもぬれず競馬きはふをみるももりの下かげ

季鷹今年八十四、高屐不用杖。壯健可感、唯耳聰カラザルノミ。井關大ニ酒食ヲ設ク、珍味

アリ。神山ノ松茸、加茂川鯉ノ打躬、年魚、ゴリノ様ノモノナリ。及初更歸……。

とある。季鷹の晩年の風貌を傳へる語である。「高屐不用杖、壯健可感、唯耳聰カラザルノミ」の語が注目せられる。天保四年八十四とすれば、天保十二年十月は、九十二歳となり、誤りがあるが、これは季鷹自身が誤つて傳へたのかも知れない。松田直兄の碑文を左に示せば、次の如くである。現在は季鷹の墓石は西賀茂の小谷墓地にあり、腐蝕して讀み難い文字もある。石碑の正面には、「前一老安房守正四位下賀茂季鷹縣主之墓」とあり、その側背面に、

季鷹縣主號生山又著雲錦遠祖父母君並任官除位等乃事波 公爾毛著明久家系ニ詳奈禮略寸師

早久有「栖川宮織仁親王爾仕倍給比御寵不斜爾生質志大才」高志且十九歳乃秋致仕且赴江戸

巧能書斯給倍婆諸侯乎初門弟子許多隨從布三十八歳春還賀茂專 社頭爾奉仕扨御手洗川乃後

瀬清幾地爾吉野立田之花紅葉移植而營別莊稱雲錦亭又造歌仙堂祠山柿像傍爾並建文庫倭漢

之書籍數千卷乎藏其書悉校正志頭ニ「傍爾加朱給倍流 如雲似錦然禮者天雲之彌高支御方餘理

此文庫中爾在乎證本爾借用給比將貴賤乞歌需書」毛如雲天下耳美名乃滿留亦如雲爾奈有氣文化

十年「石清水臨時祭再興之御時可令諷賜能宣朝臣乃歌錯亂多留上卿廣橋從一位胤定餘仰事承

且熟考」上聞給倍善可連歌道發明堪賞普告世間可傳子孫云」云感狀遠賜比此數多之名譽雲錦

翁傳爾委久著書」詠歌等上木且世爾灼然加禮省多利天保十二年辛丑十月初病且臥床給布御枕方

爾親族門人等侍留平生」休ニ滑稽言給比同月九日九十歳爾加睡爾卒去給倍兼而欲全百年壽止

言給多里猶不足念比給倍侍利志平「百」年不全斯會悔久歎加有計流隨御遺命奉葬此中河原萬世」迄御

名止共爾不朽牟碑者物世流也

從五位上賀茂縣主季護建

門人正四位下伊豫守賀茂縣主直兄誌

とある。季鷹の歿年を誤り傳へたのは、この碑文に起因するのである。傍に季鷹の妻の墓があつて、正面に「季鷹縣主妻 源千賀子之墓」とあり、側面に、「文政六癸未年八月十六日卒 孝子容顯建之」とある。

## 鹿嶋紀行

久かたの天あられしといふ二のとしの長月十日あまり二日といふに、下つふさのくに、なつそひく海上郡、寺井清榮ぬしにゆくりなくいざなはれて、大舟の香とり、あられふりかしまをかけてまうでんとて、旅まうけす。とみの事なれば、いづこにもくしらせでいでたゝむとするを、いかほのぬまのいかにしてかきこえけん、高はしの榮雄ぬしのもとより物にそへて、

千盤破神はとむとも長居すな露霜ふかき草の枕に

又大江の布佐高ぬしより言葉おほかりて、

月かげに心をそへて君またんはつかときし旅ぢながらも

こははつかばかりにかへり來べきよしきこえたればなるべし。又八十子君のもとよりも、

風なふきそ雨なふりそとねぎまつる心ばかりは君にそひなん

又大江の豊秋ぬしのもとより、是も物にそへて、芦分舟のさへありて、もろともにあまうでぬよしなどいとおほかりて、奥に、

天よりも思ふ心はさきだちてかしまの神にぬさを手向けん

又、

雲井まで君に心はそひぬめり浪のうきねはともにせねども

などありしかへりに、

大舟のかとりのうらのとりもあへず立歸りこん沖つしらなみ

とか書つたりけん、大かた物もおぼえぬ程の心あわたゞしさに、ことくにはかへりもえよまず成にき。又源躬弦ぬしのもとよりは、しばしいめせぬはいとさうぐしかれど、又めにみえぬ心をなどいへば、おもしろき海山をみ給ひつゝ、をかしき歌などよみいで給ふらんと思ひやれば、みづから見侍らんにも増りてうれしうさへ思ひなりぬ。されどおなじうは日數へずなど、言のはいとおほくて扇にそへて、

水清きとねの川せにあそぶてふこひざらめやも立わかれなば

東路のみちのはてなる旅ぢをも猶神山の神やまもらん<sup>守</sup>

など、菅の根のねもごろにきこえ給ふるを、こよなう悦思ひ給ふるものから、何くれとあわたゞしければ、歌よむべいこゝちもせねど、神山の神をさへかけ給ふをさりとてなほやはとて、かしこまりを紙のはしに書て残しておく。

村鳥の立のいそぎにあられふりかしまてふ名はしり初てけり

とのみきこえのこし侍りにき。かくて暮過る比、やどりをいで、明日舟にのるべき川つらの家迄出たれば、清榮ぬしもまちとりて、諸共に物などたうべて、舟よそひなどせさせて、子の時計に枕をとる。爰はとなりといふばかりいとかきわたるなれど、まだきにたびの心ちするもかつはあやし。曉そこを立て、前なる川より舟にのる比、よべの空にかはりてくもかゝりたれば、みるめなき舟のうち、いふせからん事をかたらひつゝ、<sup>棹</sup>さをさし下すに、さかさといふわたりになれば、夜はほのくゝと明にたり。雲もやうくはれわたりて、ひろらかなる水のおもひひしらずをかしきに、こゝかしこ雁のおり居、あるは、うす霧渡れる空の艶なるに鳴わたるなど、ゑにかゝまほしきさま也。やがてとね川にさをさしかゝるに、此川は今こし水とはやうかはりて、こなたさまにみなぎりおつれば、水なれぞをなれたる舟人も、さすがにさをさしわびたるさま、いとくるしげ也。長月十日あまりといふあしたの川風さむしとも思ひたらず、さをのあたれるむねのあたりよりはちさへながるゝなど、みればやすげなき世わたりのほど思ひやりて哀におぼゆ。



夕なぎに塩やく浦のあまならでからき世渡るとねの川長

行徳といふ所よりかちにて行に、降つゞきたる雨のなごりに、わらぐついとおもたゞしくて、大かた行わづらひたるに、道くる人、此道は水いでゝ行がて也、ことみちをいませなどいへども、此ともなへる清榮ぬしは、さる東のはてにうまれながら、うち日さす都もおもなき計みやびこのみ給ふ人になん、されどさすがにたけきをこゝろありて、千よろづの軍なりともなどいひけん人にもおとるまじう物におそるゝ心などは露ばかりおはさぬ人なれば、さはいへど何ばかりの事かあらんとて、いざなはるゝにまかせてゆき行に、一とせむさし野の月みんとてまかりたりし道をこそ、其をりの友どちをりふしにはいひ出つゝかたらひ草にもすなるに、聊もたがはず、わらぐつなどはどゞぬぎ捨て行なやむに、いと大なる川あり。これは彼道行人の、かしこうをしへける所なるべし。はるかなるむかひより馬のわたりくるをみるに、はるびもみえぬほどなれば、こはいかにせんとわぶるものから、さりとてにげさまよはんうしろ手くやしかなるわざなれど、いざやわたりてんとて、旅衣のすそたからかにかゝけてわたるに、水はおびもひたるばかりたかければ、ひやゝかなる事いふべくもあらず。かくてこそ人のことのははたのむべきものなれなどいひあへれど、かひやはある。からうじて四五町ばかりわたりて程なくかまがやといふにつきぬ。誠は河にはあらで、此日ごろ日をふる雨に野澤の水のあふれ出てひとつにおちあひたる也けり。そこにしばしやすらひて、ぬれたるそでをかはかしなどしつゝ、行に、いとひろらかなる野に出たり。又草より草にといひしむさし野は、今は跡だにさだかなら

ぬを、こは誠にめのかぎり山はなくて、すゝき高かやのみおひしげりたり。こゝかしこ駒のか  
 いつれてあそぶぞいとめづらしきや。道の行手にはやゝうつろひにたれど、猶をみなへし、き  
 ちかう、われもかうなど、百草の花咲つゞきたり。歌には千くさもゝ草などよめるは常の事な  
 れど、故郷の嵯峨野などいふわたりさへ、今は田にのみすきかへして、むかしの名残だになけ  
 れば、かゝる野のさまめにみるはけふぞはじめなりける。かゝれば此けしきみせてしがなと思  
 ふつらぞいとおほかりける。

あげまきも心やしけんまぐさかるかまがやの野に花咲みてり

色々の千ぐさにとまる心かなまねく尾花はよそにみしかど

など、たゞごと歌のまいひもて行に、ふりみふらずみといふ神無月も遠からぬけにや、又空う  
 ちくもりて時雨降出たり。けさのそではからうじてほしにたるを、又しとゞにぬれにたり。さ  
 ばかり廣き野なれば、佐野のわたりならで立よるべき木かけさへなきぞいとわびしきや。千ぐ  
 さやちぐさのけうもさめて、ひちがさして白井といふ所につきぬ。此むら長の名を、赤井九郎  
 右衛門とかたるぞ、されてをかしき。こよひは木おろしといふまで行てたゞちに舟にのるべき  
 あらましたれど、雨もこぼすがごとふり、道も遼なればとて、げにあやしき家のあるにやど  
 りをとる。猶ふりしきりたれば、あづまやのまやおもひやらるゝ雨そゝぎになん。人々かれい  
 ひなどたうべて、けふのくるしかりし水、をかしかりし野のさまなどうちかたらひなどすめ  
 り。こよひは十三夜なれど、いひいづることさへなきに、むさしあぶみさすがにひなには有け

るかゝるすまひは、やうかはりて、中／＼をかしなど、物がたりなどにもいへれど、それも大かたこそあれ、家のうちのむづかしさ、たとしへなければ、何のをかしきふしやはあらん。おのづから歌よむべきこゝちもせば、とくいねぬ。つとめておきいでゝみるに、猶はれやらねば、雨よそひしてうまにのりて、木おろしといふ所にいたりて、舟にのる比、名残なう空はれわたりたるを、みな人悦あへり。是もとね川の流也。さをさし下すに、所の名は何とかやきゝたれど、いとむくつけゝればかきもとゞめず。いとひろらかなる水の面、浪しづかなるに、月さへ出たり。こし方をみれば、ふじのね遙にそびえ、きしの方にはつくばねも見えわたれるさま、すべて／＼いひつくすべうもあらず、をかしき夕ぐれ也。

ふじつくばあらしひ立る東路のとねの川瀬に月をみる哉

みせばやな都の人にあつまぢのとねの川せの秋のよの月

さびしとて宿を立出てみし人にみせばやかゝる秋の夕暮

かへす／＼けふある所なれば、川かぜのさむさもわすれてよも更にたり。めにあくとはなけれど、いそぐたびぢなれば、舟をいだして、多川神ざきなどいふを過て、夜中うちすぐるころ、津のみやのきしにつきぬ。こゝは香取のおほみかみいとちかきわたりなれど、夜中にまうでんもいかにぞやとて、こよひは此きしに舟つなきて、又京都中納言の、

香どりのうらのうたゝねになみのよる／＼かよふ杜風

との給ひしも、をりにあひて思ひ出られたる。よのほの／＼と明る比ほひ、いづくにかあらん

かねのこゑ遙にきこえ、月はきら／＼ととま舟にさしたるなど、いとめづらしき曙也。月落鳥啼てといふからうたの心おもほえてをかし。

わがそでに霜の置かどみえつるは咎もる月の影にぞ有ける

明はてゝかどりのやしろにまうづ。けふは十五日なれば宮つこ淨衣をないがしろにきなしてま

うづるさま、さるかたにをかし。廣まへにぬかつきて、草枕たびぢのつゝみなからん事などいの

りたいまつりて、又舟にのりて、かしまをさして行、いたこといふ所はうかれめ多しときゝ及

びにたる所なれば、いかならんとゆかしけれど、例のいそぐとて、よそにみつゝ行すぎぬ。家

居などは大かたかはれる事もみえわたらず。うまの時過るころ、鹿島にはまうでたり。御まへ

にぬかづくとて、

故郷の子らも妹らもさきくあれとかしまの神にぬさ奉る

となんいのりまつる。宮ゐのふりたるさま、えもいはずいとたふとし。かなめいし、みたらし

など、あないする人ありてみるに、石はなにの見所もなし。みたらしのすみたるさま、世にし

らずいと清ら也。かくて舟にかへりて、此ともなへる清榮ぬしのふるさと、海かみさしてこぎ

ゆくに、南のかぜ吹いでたれば、舟人いとゞさをもとりあへずくるしげなり。やゝくれ過るこ

ろ、沖べに出たるに、風もをやみてうみのおもいとのどか也。霞のうら近きわたりなれば、先

思ひ出られたり。そも／＼かしまにまうでん志は年來ありけれど、えはたさゞりける事など思

ひつゞけて、

すがめまりいつかと思ひし衣手のひたちのかみをけふみつる哉

こよひはもちのよ也けり。かくて猶こぎ行に、そがひに同じ程したる高ねの立ならびたるはま□の方也  
がふべくもあらぬ山也けり。

こぎいでゝかへりみすればほのゝと雲井に高きをつくばの山

とぞいはるゝ。はるかなる波間より月の出たるに、雁の幾つらともなく鳴わたるけしき、いひ  
しらずおもしろければ、

すまあかし浦つたひけんいにしへの秋覺ほゆる浪の上の月

かくていきすの森の前わたるに、つな手ひき過んもかしこければ、舟よりおりてまうづ。木立  
いともものふりて、神さびたる宮居に月はくまなうすみわたりて、いとゞかうゞしきひろまへ  
也。

神がきをいきすぎがてにまうできてぬさ奉る心しりきや

月はくまなくはれたれど、松杉のしげうしげりて、さすがにをぐらくて、ものゝあやめわきが  
たければ、たゞまうでたるを思ひ出して、舟にかへりぬ。此高井のわたりにをかくめとてあ  
り。みえねば玉だれのをかめやいづくどふといはるゝ。めづらかなるうみづらの月を徒にねて  
あかさんはをしかるわざながら、更行まゝにとまもる露ぞ雨よりもげにそでもとほるばかりな  
れば、とふの菅ごもなどふきそへて、かぢまくらをまきてしばしふすかとするに、潮のひくを  
りなれば、やがて鉾子につきて清榮ぬしがり行たれば、夜は明はてにたり。賀茂の季鷹しる

す。

天保十年己亥六月廿七日寫しをはりぬ伴直方

### 解説

この鹿島紀行は、賀茂季鷹が江戸在住中、天明二年（一七八二）九月十二日、江戸を出て、香取鹿島の神宮に詣うで、常陸の寺井清榮の銚子の家へ行つた時の紀行文である。傳本は、東京教育大學藏の伴直方の寫本で、不盡日記の後に書寫せられたものである。縦二七・三糎、横一八糎、楮紙袋綴、一面十一行平假名寫である。本書には句讀點及び濁點を加へた。本書の翻印は中田祝夫博士の御援助に負ふものである。

### 富士日記

やまといふ山のなかにふしの山の世にすくてたふとくひてたる事はいふもさらなりひと日わか季鷹縣主のはやくあつまにくたりしをりかの山にのほりし日記なりとてとうてゝ見せたまふを見もて行に其ところ／＼今たゝまのあたり見る心地せられていつのほどにか旅なるおもひをなしつゝかくてよみはてゝあやしう日ころをへてかへり來つるやうになんなどいへるをりしもかたへにありつる城戸千楯かゝるものをたゞにおくへきやはかのふしをしも山川のおとにのみ

きくらん人にこゝなから見せもしをさなきものまなひ人のふみかきならはん山口にもなさはや  
といひて菅原雪臣にあとらへてやまどもろこしのふること引うたなどかたへにかゝせて木にゑ  
ることにほなりになりことはの世にめてたくひてたることはさらにもいはす見んひと見てしる  
へきなりけり

○序文件氏本ナシ

文化十一年九月

三宅公輔識

(岡豊彦 富士山圖)

明和九年正月十九歳にて始て下りし時

季鷹

○すべて五度はか  
り伴氏本ナシ

をとゝし下りし時

東路廻往還毎に富士之嶺は見之眼耳毛似受驚かれ箇

淺間社在甲斐國都  
留郡吉田村  
(東京都中央區八  
丁堀町)

ことし寛政二年七月十八日、富士にのぼりて見むとて、彼山かの山のふもとにしづもりませる、淺  
間社のみやつこ刑部おさかべの國仲に、はやうちぎりおきたれば、かりそめの旅よそひして、供と  
する人ひとりかいつれて、夜明るのあくるころほひ龜嶋しまのやどりをし出、わがのぼらむとするふも

釐

妻子

○ことしは

とは、甲斐國鶴郡なれば、先門出よしとて、家なるめこよろこびあへり、今年十とせはたとせにも稀なるあつさなれば、な出そとゞむるもあれど、彼いたゞきは、例のてる日のさかりにも、

盛にも

霜月しはすばかりのさむさとき、おき、かつひと、せ肥後國のはかせ、玉山大人のぬばられし

の、

をりのひと巻を見しより、しきりにゆかしきうへ、かけまくもかしこき、大御めぐみもて、か

おほん

彼國の權守にさへよさしたまへれば、せめてたゞにも行て、見まほしきこゝちせらるゝは、か

任給

つはおほけなきことに侍れど、いかゞはせむ、楊名介といはれけん世さへ、いまは忍ばしき

事

ん

や、かゝることゞもは心ひとつにこめおきて、まづ富士をこそとて出たち侍るものから、すべ

先

○こそナシ

物

てちかどなりにもしらせで、ゆくをいかでかは、もれきこえけむ、物部信説のもとより、もの

物

にそへて

行を

ん

物

雪きえぬ峯の夜あらしいかならむすそ野の露に長居すな君、とあればかへし

嶺

ん

千とせへむつるの齡を甲斐にゆきて君があたりの家づとにせん、とて出たち侍るとて

ん

よはひ

行て

此このたびのゆくさきもくさきくあれとぬさむけまつる長ちはの神、とぬかづきまつりて四

往行さ

來

平安幸

幣

奉

谷にゆきいたれる頃、夜はあけはてたれど、霧いとふかし高井戸、石原などいへるあたりは、

行

比

時

○わ

去年の秋躬弦と、もに、むさし野の女郎花ほりに出たりしとき、とほりし道なれば、其をりか

みち

へさに、日くれ、いとくるしかりしことなど、おもひつゞけつゝ過ゆくに、午の時ばかり府中

事

行

につく、ここにまつれる六所明神の御社にまうで、後、しばしいこひて、晝のかれいひたうべ

鮎

てゆくに、あつき事たとしへなし、蟬の聲しきりになきければ

こゝろ

鳴

古事記云次於投棄

御帶所成神名道之

長乳齒神

(東京都新宿區)

(東京都杉並區高

井戸町)

(三鷹市上石原

町)

○延喜式小野神社

○六所明神

倭名抄云武藏國府

在于多摩郡

(府中市)

倭名抄云武藏國府

在于多摩郡

(府中市)

六所明神延喜式所

謂小野神社

入道云楊名介正權

之伴氏本にもアリ

頼業私記云故信西

縣主の甲斐權守に

任られしは天明六

年十二月十九日な

り



魂神社

(東京都日野市)

(八王子市)

萬葉第十五過所なしに關と云ひけるはしとゞきすあまたが子にもやますか  
關市令云凡向關國而請過所者本部具錄其事及人物名數二通申送所司云云式令有過所者公六典云凡度關者先經本部司請過所者  
○伴氏本にも右の注アリ  
(東京都の西境)  
駕籠の名目の古きものに見えたるは康應二年三月庚辰院殿敷島日記に御前濱の鳥居のほと

駕籠の名目の古きものに見えたるは  
康應二年三月鹿苑  
院殿嚴島詣に御  
前濱の鳥居のほと

鳴  
せみ  
こゑ  
時雨

川原に出たるに、久しき日でりに水もかれたりとて、いとあさければかちわたりす

袖たれてわたれどぬれぬむさし野の玉川の名はあせにぞありける、などたゞごとをのみいひ  
つゝ、申の時過るころ、日野のうまやをゆくに、いさゝか高き坂あり

日野坂をうちこえ見ればむら山にまがふ山なき山そびえたり、坂の名もしらねど、とふべき人もあらねば、やがてかくはよめりしなり、目くればてゝ八王子のうまやにやどりをとる

十九日との半ばかりにやありけむ、  
宿 立て 分行に  
やどをたちてわけゆくに、月いとくまなくて、道の行手

松 鐘 虫 聲々  
には、まつむしすゞむし、こゑぐにきほへるさま、いとおかし

立ちへり又虫音  
たち歸りまたも見てしがむしのねの月にきほへる武さし野の原、駒木野の關にかゝれるころ、  
比

明はてたりあらがきをこえて、關屋のすのこのもとにゆきて、行合過所を出したれば、關守ひとり

ひづらき居たるが、ひらき見て、とほりたまへ給へといへるさま、何となくむかしおぼえておか

し、小佛峠、一里十八町といふを、よぢのぼるほど、例のあつきたへがたし、道のゆく手の竹

を折て杖につき、谷陰の清水をむすび、からうじて、いたゞきにのぼれば、ちひさき家二三軒

あり、そこにあやしき襦籠をおろして、○すゑて其わきをかこみながら、いこへる人五六人あり、こな

たのあるじにとへば、とがはしり侍ねど、甲府より江戸にゐてまうづる、つみ人に侍るなりと

きくに、<sup>○彼</sup>顯基中納言のどがなくて、配所の月見てしがなとねぎたまひしやうに、けふのあつ

き、此山のさかしさ、いはむかたなうくるしければ、罪つみなくてかごにはのらまほしくぞおぼゆ

りより駕籠にて御  
舟にうつらせ給ふ  
云々

顯基卿ハ西宮左大  
臣殿の孫、大納言  
俊堅卿の男なり  
○顯基の注伴氏本  
にもアリ

羅旬語に胡泥可兒  
奴と云も一角とい  
ふことにて古來獸  
角なりともい  
ひしに近頃西洋人  
クルラントの地を  
開てより魚牙なる  
ことをしれりとぞ  
○伴氏本もこの注  
アリ、とそハナ  
シ

(神奈川縣津久井  
郡吉野町)

(山梨縣北都留郡  
上野原町)

る、すべてこゝより末は、めのかぎり山つゞきたれば、いかにぞあるじ鹿の音などはときくに  
、鹿はさらなり、也此この二三日をちかた、○つかたかれ見給へあの谷は家ひとつ侍るが、日もくれぬに、  
いぬの出で、機はたおりゐたる女に、とびかゝりてくひつき侍るを、そがをどこ、ちかき山に山畑はた  
作り  
つくりゐたるが、家にいぬの入たるをとく見つけて、はせ歸りてくはもてかなぐりこらし侍り  
つ、大かた、いぬにくはれし人の、たすかる事ことは侍らぬを、うにこるとやらむ、いとたふとき  
くすり  
薬を、人のあたへつるけにや、死ぬべくも侍らずとかたるに、其いぬは病つきたるにやとゝへ  
然然ば、しか、おほかみのやまひつきたるに侍り、さらぬは、つねに軒のわたりに、はひめぐらひ侍  
れど、人をばいたくおそれ侍るなどかたるさま、事こともなげなり、かの在五中將の物語に、そ  
れをかく鬼おにとはと侍るにはことたがひて、さもおそろしきものに、世人のいひ思物へるものを、  
かりそめにかくいぬとしもいふものか、くはれしもころせしも、かへすくかしこきわざなる  
を、さりげもなくてかゝる山中に世をつくすらむことよと、おもひつゞけて、くだりざまに  
も、猶水をのみむすびて、吉野といふにいたる、名はむつまじきものから、花の春ゆかしげも  
なし、こしかたゆくさき、山々たちつらなり、おほき大なる谷川を、あるは右、○左あるは左に見つゝ、  
さかしき岩根分つゝ、關野、上野原などいへるわたりにゆけば、やうくみちもなだらかなり  
雲かゝる高ねたかと見しもいつしかとあとになりつゝ、わくる山々、分る上野原の坂本にながるゝ川  
は、相模國つくゐのあがたのはてにて、川よりをちは、甲斐國都留郡なりとぞ、すなはちつる  
川のうまやにながるゝ、つる川をかちわたりすとて

金葉集に宇治へま  
ゑりける道にて日  
比雨のふりければ  
水の出て賀茂川を  
男のかまをぬき  
手にさくけてわ  
たるをみて頼朝  
臣かも川をつた  
るにてもわたる  
かりはかまを信綱  
しとおもひて

都良香富士山記云  
役小角始得登其頂  
いまの世富士行者  
といふものは元祿  
中江戸人覺行とい  
ふ優婆塞よりはい  
まれりとそ○伴氏  
本とそナシ

寛治五年源義家朝  
臣滅奥藤原武衡家  
衡等

瑠璃壺  
峯せはき花のあた  
りに夜はあけて野  
寺のかねは松の木  
かくれ新古今集前  
大僧正慈円

あり明の月のゆく  
へをたつねてそ野  
寺のかねはきくへ  
かりける」○伴氏

賀茂季鷹遺文集

かひの國つるの郡の鶴川をつるはぎにしてわたりつるかな、ほどなく野田尻といふにいた  
る、長峯、谷のくぼなどは、また山路にていとあつし、きのふけふの空は、みなづきの照日月に  
もまさりて、野山つちの土も石もやけたるやうにて、ふみたてがたきほどなり、けふは猿橋までの  
あらましなれど、日もくれいたうこうじたれば、犬目いのめといふ所にやどる、けさより道づれとな  
りにし富士の行者、としは六十におほくあまれりといへど、脚あしはわがどちのおよぶべくもあら  
ず、いと健なりすこやか也今いまひとりむさしは武蔵の雑司谷のほとり、野寺の満行寺のあざりにて、すはの湯  
あみになんゆくなりける、此ふたりもおなじ家にやどりて、いとせばき蚊屋にふしたるに、か  
のひじりのかたらく、我寺にいつきまつれる八幡の御神は、そのかみ源義家朝臣、東のえみ  
しをむけたまひしとき、調伏したまへる神にて、調伏の八幡宮と申たいまつりて、そのかみ  
は、寺も伽藍づくりにていとおほきかりしを、在原業平卿、むさし野を焼給ひしをりに、寺は  
もとより、ふるき鐘もやけうせぬ、野寺のかねのとよめる歌も、わが寺の鐘をよみしなりな  
ど、いとひがみたることゞもを、したりがほにかたるは、なか／＼をかしくて、足のいたさも  
かつはなくさみけり、すべて東路に、八幡の御社のおほくありて、いづれも／＼義家朝臣の勤  
請といへり、さきに大なるあたをひかへて、うてにむかへる軍の道すがら、五町十町ばかり隔  
てつゝ、勸請したまはむことあるべくもあらすと、新井君美主ぬしのかきおかれしことさへ、ふと  
おもひ出せは、それだにうけがたきをや、  
廿日朝とくいのめを立て、例の山坂をこゆるに、座頭ころばしとか、里人はいひて、かたへに

本、新古今集雜上  
前大僧正慈円在明  
寺の行へを尋てぞ野  
寺のかねは聞べか  
りける  
延喜式于蘭盆供養  
料七寺之内有野寺  
新井君美の説新安  
手簡にみえたり

(山梨縣大月市富  
澤町鳥澤)

(大月市猿橋町)

○伴氏本、一つえ

○伴氏本三尋

(大月市大月町駒  
橋)

○伴氏本、たくみ

(都留市谷村町)

谷に、おちいりしめくら法師の塚も見ゆ、げに石おほく、あやふき棧路を、のぼりくだりつ、

鳥澤といふにいづ

いはくやすかしこき道をわけ來つ、見かへる山に雲ぞかゝれる、なほゆきくゝて、猿ばしの

うまやにいたる、名たゝるはしを見るに岸にはいとおほきなるいはほそはだち、水の深さは、

いく千ひろともしらず、色は藍のごとして (孝敬 絶壁にかかる橋の繪)

柱はなく、岸よりきしに桁をさし出しつゝ、こなたかなたきみ合せて、板うちわたり、らんか

んいと高くかまへたり、水ぎはまでふかき三十あまり三ひろありとぞ、しばしたちとゞまりて

見おろしたるに、めくるめくこゝちすれば、とくすぎぬ、こゝをさるはしといふは、いにしへ

ましらのつどひて、しもとをくみあはせつゝ、かなたの岸にうちわたりて、そが上をやすらに

ゆきかひせしにならひて、かけそめしよりの名なりといへど、西澤大目などつゞきたれば、例

のしひごとなるべし、此うまやにしばしいこひて、駒橋のすくにいたる、かのましらの工みを

やしらざりけん、橋はなし、こゝにて夜べ業平卿とかたりしすけにはわかれ、修行者のあない

にまかせて、谷村といふ所に行て、晝のかれいひくふ、猿はしにてかひし、おほきなるあゆを

やかせてくふに、味いとよし、此家のまへに東漸寺とて日蓮宗の寺あり、そこをさして此里人は

さらなり、ちかきわたりより、來つどへるといふ人かずしらず、あやしくであるじにとふに、

此寺のひじり、身まかりて、けふなんはうふりのわざし侍るを、見侍るなりといふに、猶あや

や

倭名鈔曲調類云  
菩薩等並哲師等所  
傳也  
羅門等並哲師等所  
傳也  
十樂古老傳云東  
大寺講會之時笛師  
常世弟魚奉敕所造  
也

(富士吉田市)

枕草紙云さてしは  
すの十四日のほと  
に雪いとたかう降  
たるを女房ともな  
としてものいふた  
に入つていとおほ  
く置をおなしくは  
庭にまことの山を  
つくらせ待らんと  
てきふらひめして  
仰ことにていへは  
あつまりてつくる  
云々

しくてとふに、すべて此わたりには、かの宗旨の寺は、これひとつにて、外に侍らねば、珍めづら  
しみて、かくつどへるなり也、されば九里十里へだちたる寺々より、おなじ宗旨の法師、さあら  
ぬも来とふらひて、其作法し侍るなりとぞ、とばかり有て、物のねきこゆれば、菩薩十樂な  
どやしらぶらむ、所のさまにも似ぬわざなれば、耳おどろかし侍ぬ、樂人はいづこよりぞと、  
へば、十里あなた甲府よりとぞいふ、さて午時もすぎぬれば、いざやといふに、きのふの山坂  
にて、あしはれ、まめなどいふもの出来て、いとくるしければ、こゝよりうまにのりて、申の  
時ばかり、心ざせる吉田里にいたりて、國仲がりつきたれば、主よろこびて、むかへすゑた  
り、まらうとゐにて、去年の春にや、しひてのぞまれて、わがかけりし仰嶽の額を、らんまに  
かゝげたり、げにたがはず、富士は清少納言が、つくり出たりけむ、雪の山のごとく、たゞ庭  
のうちなるばかり、ちかくてたかく、盆などにもりすゑたらむやうにて、そびえたり  
○日のもと  
日本のやまとの國のしづめともなるてふ山をけふ見つるかも、あるじ國仲  
露しげきふじのすそ野の萩がえに光をそへてやどる月影、といへりければ  
萩がえの露をよすがにやどりても見るかげうすきあり明の月、こよひ幡野正章来とふらへり、  
はじめてあへるものから、あるじの物がたりにて、はやうよりきゝつとて、何くれとあるじも  
ろともにかたらふに夜もふけぬれば、またあすとかへりぬ  
○歸ぬ  
廿一日朝とくおきて、まづあふぎみれば  
○先見  
こと山にしらぬ朝日を雲井にてひとりまちとるふじの高ねか、けふあすは、諏訪社のまつり

倭名抄云松明今按  
松明者今之續松乎

古今  
春の夜のやみはあ  
やなし梅花いろこ  
そ見えね香やはか  
くるゝ○伴氏本に  
もこの注アリ

本花開耶命大山津  
見神之女  
三代實錄光孝天皇  
仁和元年閏三月廿  
七授甲斐國正六位  
下藤武神建岡神並  
從五位下

曼殊院良恕親王正  
親町院第四皇子

とて、くれがたより、家ごとのまへに、たき木、ひとかゝへにもあまるばかりのかこみにて、

たかさは貳間壹尺といふが、いにしへよりのさだめといへれど中には五六間ばかりにて、馬に

おほするに、おほよそ十駄ばかりなりといふ、つい松を、たてならべたり、町の長さ十三町ば

かりなるに、残れるは、忌ある家のみなれば、おほかたも、の數やつもおよぶべきが、日のく

るゝをまちて、一時にともしつけたるさま、秋の夜のやみもあやなく見えたり、されどいかに

風のはげしきをりも、むかしより、こよひの火のあやまちは、さらになしとぞ、いともかしこ

き神の御いづは、末の世ともおもひなされぬわざなりけり、こよひ諏訪社淺間社にまうづ、名

だゝる大鳥井は、まことに名にたがはざりけり、そも、此御社は、延暦七年に、甲斐守紀豐

武田信虎朝臣はじめて宮づくりし給へりとぞ、○神は木花開耶姫命にて日本武尊えみしをむけ給ひしとき

庭あその、宮づくりし給へりとぞ、まつれる神富士淺間は、木花開耶姫命藤武神、諏訪の方

この御山を、がみませし所なるよし鳥居の、建御名方命建岡神、をいはへりと、里人のくはしくいへり、鳥井のたかさ、すべて六丈二

尺、額は三國第一山とありて、たて一丈二尺、よこ九尺、筆は、二品良恕法親王、うしろの二社

は、瓊々杵尊、大山祇命をいはひまつれるよし、國仲しるべして、やどりに歸る道、すはの社

の外つ宮の神主、佐藤上總が家にゆく、此上總は去年故郷にてあひし人なれば、おほみきなど

おろして、いさゝかもてなすさまなれど、こよひのうちに奉れるひもろぎ、七十五度にて、其

品も七十五種ありとて、いといそしきけしきなれば、とくかへりぬ、廿二日けふはまつりのす

相撲まひありときけば行て見るに、大鳥井のわきなる森の、いさゝかくぼかなる所にて、すまふな

りけり、こだかき所に、柴をりしきて見るに、いと興あり、ゆふつけてかへさに、四位のうへ

平治秘記云日蔭憂  
結冠巾子結目在縷  
上組用青糸又以白  
糸若少人或用紅梅  
又白相交又用萌木  
今度大嘗會通方朝  
臣用青糸  
日蔭尤有其謂取要

のきぬ着<sup>き</sup>たるが、日蔭<sup>かげ</sup>の糸をかつらきて、馬にのれる宮人あり、いとめづらしくおぼえて

石上ふりにし神の宮人とひとも見<sup>人もみ</sup>るがにかづらくやたれ、とふる歌めきたることをくちずさ

びつ、歸て、國仲にとへば、それなん、神主小佐野なにがしとて、五位なるが、都にのぼりけ

るをりに、何がしどのとやらんたまへり<sup>○給はれる</sup>とて、四位のうへのきぬきるよし、いぶかしきこと<sup>事</sup>に

こそはとて、所のもの<sup>ものゝ</sup>、物のこゝろしりたるは、うけひかずとぞ、日かげのいと<sup>陰糸</sup>は、みやび

たれど、此うへのきぬぞけふさむるわざなりける、神わざやゝをへつとて、上總きたりて夜ふ

くるまで物がたりせり、彼七十五度ハ、いかにしてかくはやくをへにけむと<sup>ん</sup>、きかまほしきこ

ゝちす、

廿三日よべよりいさゝか雨ふり出たり、<sup>降出</sup>けふは御山にのぼらんとて、心がまへしたれば、雨や

めてといふは、ほいなきものから、此わけ<sup>分</sup>來し村里人どもの、こゝかしこの高き<sup>たか</sup>峯にのぼり、

ふえ<sup>つゞみ</sup>笛ふき鼓うちていのり、此よし田にても、わがまうで來し<sup>こし</sup>をきかば、やがて來とぶらふべき、

倫丈法師なども、ちかき村々よりねがへり<sup>我</sup>とて、いにし十七日より、をしもの<sup>食</sup>をたちて、七日

の祈はじめて、けふなんみて侍る日なりときけば、わがあらましのたがふは、かへりてはよろ

こぶべきこと<sup>事</sup>にこそなど、あるじにかたらふほどに、かのひじりより消息して、とくまうで來

ぬこと<sup>事</sup>、このいのりにかゝりてなど、ねもごろにきこえたり、としもはたち二とせたらぬ法

師の、さるはれの祈をして、いさゝかなれど、かくしるしあらはせること<sup>事</sup>、いとたのもし、ふ

みも七日ばかりをものたてる人の、筆のすざびとも見えず、かへすゝめ<sup>食</sup>でたしかし、午の時<sup>うま</sup>

萬葉集にふしのね  
月よりける雪は二  
その夜よりけり

○伴氏本、玉葉集  
第三山部赤人  
二のねに降置る  
雪は六月のもち  
にけぬれは其夜  
降り

武田大膳大夫晴信  
後入道號信玄任大  
僧正

磐長姫木花開耶姫  
之姉

ごろより雨はれたるに、とく門に出て見たまへ、めづらしきもの見せ參らせむと、あるじのい

へれば、出て見るに、其夜ふりけりといひしにたかはず、峯のかたいとしろくつもりたり、

名にしおふふじの高ねも昨日けふおもひかけきや雪のしらゆふ、此ごろ淺間社の廣前にて、

五百重山かさなる道をわけ來つゝあふぐこゝろは神ぞしるらむ。塵ひちのつもりてなれる物

ぞとはふじのねしらぬ人やいひけむ、とおもひつゞけしをおなじくは書て奉れと、あるじのす

ゝむるにまかせて、かの四位の袍きし、五位の神主のもとに國仲して奉りつゝ、また朝夕となく

來とぶらふ幡野正章、こゝろざしは侍る物からなどいへりければ、

高しとてのぼらざらめや禁よりわけ見よふじのやまと言の葉、といふにかへし、

言の葉のみちしるべせよ富士のねのふもとにしげき露のしたくさ、

○三 廿四日けふは空はれ、高ねの雪も消にたれば、いざやとて出たつ、かねてはあるじしるべすべ

かめりしを、此ごろをさな子のものがさやめれば、すべなしとて、がうりきと名づくるものをそ

へて、あないとせり、卯の半に家をたちて先大鳥居のうちなる、淺間社にまうでゝ、登山門を

とほりて、うまがへしとあざなせる、すゞ原まで、すそ野三里がほど、馬にのりて、そこより

かちにてのぼる、高ねまでを十にわりて、一合二合ととなるは、おほかた一里二里といへら

むがごとし、三合めに御室權現と申は、木花開耶姫、かたへの祠は信玄僧正をいはひたるにて

こゝまでは女ものぼれりとぞ、四合め、御座石の社は、磐長姫命、いさゝかのぼれば、右に鳥

居あり、小御嶽にまうづる道なり、今は石尊權現といへど、日本武尊經津主命をあはせまつれ



李白詩山從人面起  
雲傍馬頭生  
○伴氏本にもこの  
注アリ

○伴氏本、千ひろ

賀茂季鷹遺文集

りと、かねてき、おきたれば、かへさにまうでんとて、ひたのぼりにのぼる、○五合め中宮と中宮と額うちたるは、おほひるめのむちをしづめ祭れりとぞふもとより此あたりまでは、木だちふかく、めなれぬ木草おほかるなかに、富士松といへるは、世にいふから松にて、いとおほく、雪にされたるなるべしからめきてたちならべるさま、いとおかし、大かた一合ごとにいひて、汗おしのごひつゝ、くろき色したる茶を、あやしきうつはして、飲てのぼるに、あとより潮の涌ごとくに、雲たちのほりて、見るがうちに、高ねをさしてのぼれけりれば、  
ますらをのたけき心はおこせども雲のあしにはおよばざりけり、雲は馬頭より生ずとか、○におこりとか  
ろこし人のいひたるもさることながら、そは馬もかよひたらめ、此山は鳥だに見えわたらず、雲もかくはるかなる、禁のかたよりきそひのぼれゝば、かゝるたぐひはまたあらじとぞおほゆる、六七合あたり、かま石、えほうしいはなどいふ所々は、草も木もすべてなく、焼たりとおほしき物から、むらさき、あるは黒色したるいさごの、かどだちたるを、からうじてよちつゝ、未のとき時ばかり、八合めの石室につく、おほかたはこゝをとまりとして、あすつとめて、いたゞきにはのぼれること、聞たれど、おもひのほか日も高ければ、いかにとがうりにとへば、うべいまよりやどらむはふえうなり、しかおほさば、とくこそなどいへば、しばしいこひてのぼるに、九合よりうへのさかしさは、誠まことにたとへむかたなし、例のますらをごゝろふりおこして、こゝしき岩いはかどをよちつゝ、からうじてのぼりはてて、見るに、いたゞきはおもひしよりまたひらかにて、中を見おろせば、くぼかなるが、底そこはすばみていくちひろともはかりがた

萬葉集にさぬらく  
は玉のをばかりこ  
かねの鳴澤のふし  
都留郡のうちに鳴  
沢といふ里あり

し、いにしへ煙のたちしあと、しられたり、鳴澤はいづことしらねど、おほきなる川水の、谷

にひびきてなぐる、おとにもきこえ、はた松のむらだちに、秋風しらぶるやうにも聞なされた

り、こはそとものかたにて、石のくづれ落る音なりといへど、とことはに、さることあらむと

も思ひなされねば、とにかくに、此中くぼのわざならんかし、めぐりは一里ばかりありて、釋

迦のわり石、さいの川原などいふ處々ありて、めぐりをがむなり、まはりたまひなんやと、あ

ないのいへどうちぎ、もゆかしからぬうへ、其所々も、大かた見たさるれば、そこはめぐ

らで、右のかたに原のごとき所有に、いさ、か下りて見れば、是なんおさんすいなりといへ

り、ちひさき井なれど、いかなる日でもかかずとぞ、うべ、ことしの夏だにかれせねばあ

やし(富士山絶頂圖 原在明寫)

き水なりけり、いまふたつおなじさまなる井あれど、そこは水かれて、雪いさ、か消残りた

り、おもふに山水を三水と、ひが心えせし人の、掘そへしなるべし、そのあたりの石も、やけ

たらむと見ゆるが、おほきが中に、むらさき赤白などのまじれるを、山づみにこひまつりて、

家つとにもし、かつ後のわすれがたみにもとて、いさ、か拾ひて、もとのいたゞきにのぼりた

る比は、日も西にかたぶき、わけのぼりしかたは暮たれば、山のかたち、はるかなる海づらか

けてうつろひたり、朝日にはまた、西にうつろふとぞ、箱根あしがら山なども、たゞこのふも

とのごとく、見おろさるれば、まして其ほかの山々は、たゞおほちとひとつに見えたり、また

古事記云次生山神  
名大山津見神

○伴氏本、おほ地

雲たちのばれば、雨やふらむといそぐにふもとよりのばれる雲は、いさ、かもかしこきことな

し、此中くばより雲もたち、風も吹いだせば、かならずあるゝとなむ、烟はたえてなしやととへ  
ば、いまも時にふれて立のぼれるを、里人は見待るとぞ、くればてなば、かのいはかどいど  
かしこからむとて、やどりとさだめし八合めの石むろにからうじて下りつきぬ、此山のあるや  
う五合めまでは、かりそめの板屋なるが、六合めよりいたゞきまでは、大きな巖をたてにと  
りて、三方をも岩もてかこみたるが、二間に七間ばかりなる中に、土のうへに板をならべ、む  
しろをしき、<sup>火</sup>すびつをかまへ、雪のこほりたるを、桶の上におきて、其したゞりをもて、茶を  
も煮、いひをもちしぐなりけりうちぎゝは氷室めきて、きよなるやうなれど、雪はくろき土  
のなかより掘いだせしまゝなれば、砂もまじり、<sup>すな</sup>あくもありて、濁れるさま、たゝへおき  
たる雨水よりも、いますこしむつかし、もとよりさる石むろの中なれば、誠に飢をたすくるの  
みなり、六月朔日より山をひらきて、七月廿五六日までにて、人もものぼらず、いはやも岩戸をか  
ためて、おり待ぬなり、されど、この頃となりては例の年はのぼる人もなければ、ことしはあつ  
きとしなれば、かく人も待るとあるじかたれり、こよひ此室にやどれる人、法師四人、行者一  
人、これかれすべて十人ばかりなり、山づみの御こゝろなごみ給へるけにや、いさゝか風もな  
し、夜ふくるまゝに霜月ばかりのやうに、ひやゝかなるに、のみてふむしのいとおほく、さら  
でも此山の上に、<sup>斯</sup>かくいぬることよとおもひつゞくれは、めもあはぬを、人はさもおもひたら  
ぬにや、こゝろといひきたかくして、うまいせるさまに、いとゞ心すみて、さびしきことた  
ゞおもひやるべし、やゝ子のときも過ぬらむと思ふころ、ゆばりせまほしければ、供のをのこ  
し、<sup>今</sup>此中くばより雲もたち、風も吹いだせば、かならずあるゝとなむ、烟はたえてなしやととへ  
ば、いまも時にふれて立のぼれるを、里人は見待るとぞ、くればてなば、かのいはかどいど  
かしこからむとて、やどりとさだめし八合めの石むろにからうじて下りつきぬ、此山のあるや  
う五合めまでは、かりそめの板屋なるが、六合めよりいたゞきまでは、大きな巖をたてにと  
りて、三方をも岩もてかこみたるが、二間に七間ばかりなる中に、土のうへに板をならべ、む  
しろをしき、<sup>火</sup>すびつをかまへ、雪のこほりたるを、桶の上におきて、其したゞりをもて、茶を  
も煮、いひをもちしぐなりけりうちぎゝは氷室めきて、きよなるやうなれど、雪はくろき土  
のなかより掘いだせしまゝなれば、砂もまじり、<sup>すな</sup>あくもありて、濁れるさま、たゝへおき  
たる雨水よりも、いますこしむつかし、もとよりさる石むろの中なれば、誠に飢をたすくるの  
みなり、六月朔日より山をひらきて、七月廿五六日までにて、人もものぼらず、いはやも岩戸をか  
ためて、おり待ぬなり、されど、この頃となりては例の年はのぼる人もなければ、ことしはあつ  
きとしなれば、かく人も待るとあるじかたれり、こよひ此室にやどれる人、法師四人、行者一  
人、これかれすべて十人ばかりなり、山づみの御こゝろなごみ給へるけにや、いさゝか風もな  
し、夜ふくるまゝに霜月ばかりのやうに、ひやゝかなるに、のみてふむしのいとおほく、さら  
でも此山の上に、<sup>斯</sup>かくいぬることよとおもひつゞくれは、めもあはぬを、人はさもおもひたら  
ぬにや、こゝろといひきたかくして、うまいせるさまに、いとゞ心すみて、さびしきことた  
ゞおもひやるべし、やゝ子のときも過ぬらむと思ふころ、ゆばりせまほしければ、供のをのこ

悦目抄  
ろかいたて水門も  
しらぬ夕やみに舟  
こきいたせ夜はの  
月しろ

伊勢物語に  
その山はこゝにた  
とえはひへの山を  
はたちはかりかさ  
ねあけたらんほと  
して云々

白樂天詩白雲似帶  
繞山腰青苔如衣掛  
岩肩

をおこして、室の戸を明させて、やをら出て空をみれば、星の光きら／＼として、東のかたは

月しろとおぼえて、海のはてなるべし、横ざまにたなびきたる雲間より、光ほのめけば、手あら

ひて出るをまつ、法師たちもよひにちぎりおきたれば、おどろかするに、とくめさまして、お

なじくうづくまり居てまつ、かの行者も出て、何やらむいと高らかにとなへて、ず／＼おしもみ

ゐたるは、すこしかしましきこゝちす、室の外三四尺ばかりはたひらかにて、下ははひのぼり

し山路なれば、いとあやふし、とばかりありてさしいでたり、

はたちばかり重ねあげたる山の上に廿日あまりの月を見るかな、また日の出を見んとてしば

しまくらをとる、

廿五日夜べのごと光ほのめけば、例の室の外にいでたるに、此みゆるかぎりの、國々の野も山

も、見おろせば、おしなべてくが地と見ゆるに、雲はこの山の帯のごとく、いくへともなく、

綿をうち／＼したらむやうに見ゆ、さて東南の海づらいとよくはれたるに八重の鹽路の、汐の

八百合に、浪をはなる、日の御影、さらにこゝろこと葉もおよびがたし、ちか頃肥後の玉山と

きこえしはかせの記に、つばらにのせたりひらき見るべし

ふじのねにふりさけみれば青海原とよさかのぼる天つ日のかげ、かくて朝のかれいひとて、

あやしきかゆやうのものでうじ出したるを、いさ／＼かたうべて、人々は高ねにのぼり、我輩

三人は二王の前にさ／＼げしやうなるわらぐつを、うへにはきそへて、左の方へ横ざまにをれ

て、五合めまではすばしりとて、ありくともなく、たゞすべりにすべり下りて、砂はらひと

い

倭名抄云本草云石楠草倭名止比良乃木俗云佐久奈無佐庭木歟或人云壽○伴氏本、二つの注アリ

(富士吉田市)

ふ所にてかの大わらぐつはぬぎ捨て、<sup>すて、</sup>又<sup>方</sup>また左のかたへ十七八町ゆけば、小御嶽の御社なり、此わたりは、きのふいひしごとく、いと木ぶかくしげりて、木陰には、さくなげのいとおほきなるも見ゆ、<sup>又</sup>またはまなしとて、葉のかたちは楓のごとく、<sup>つげ</sup>実はいとあかくて、<sup>み</sup>南天燭のごときちひさき木あり、こはさきぐ、國仲より、實を<sup>み</sup>しほにつけて、おくれりしものにて、見しりたれば、とりてくふに、まだしければにや、<sup>あちは酸</sup>味ひすし、一もと根こじてもたせられど、おひつかむことはいとおぼつかなし、さて御社にまうで、<sup>みち</sup>もとの道を五合めまで出て、こゝかしこに、こしうちかけていこひつゝ、<sup>はら</sup>す原まで下れるころは、<sup>比</sup>午のときばかりなり、<sup>うま</sup>そこにこはいひありといへば、いさゝかたうべて、かへさの野ぢ、名にしおふすそ野なり、きのふもとほりし道なれど、たゞむかひにむかへる、<sup>みち</sup>たかねをのみ、あふぎ見つゝ上りたりしけにや、<sup>故</sup>めとまらざりしが、けふはかちなれば、こゝろのまゝにわけゆくに、<sup>分行に</sup>をみなへし、<sup>女郎花</sup>きちかう、<sup>桔梗</sup>われもかうなどをはじめて、<sup>草</sup>しるしらぬ千ぐさの花咲みだれたり、

<sup>高根</sup>時しらぬたかねの雪にあえませば千草もとほににほふべらなり、<sup>思ひ</sup>とおもひつゝけて、<sup>我</sup>われも<sup>手折</sup>たをり、<sup>破子</sup>人にもをらせて、うまの半ばかり、<sup>かへり</sup>吉田のさとに歸り入たれば、國仲いで、坂むかへにとて、<sup>今</sup>わりごやうのものてうじたるを、<sup>識</sup>いますこし過して、ふもとまでむかへまゐらせむと、まうけたるを、こよなきはやさかなといひて、

みがきなす君がこゝろの先見えて四方にくまなくあふぐふじのね、といへりければ  
ふじのねにいかでのばらんは<sup>端山</sup>山づみしぎ山づみのめぐみかけずば、夜に入て倫丈大とこ、正

古事記云所殺迦具  
土神中略於左手所  
成神名志藝山津見  
神次於右手所成神  
名羽山津見神

章など、よろこびにまうで来て、夜ふくるまで物がたりし、よみおきし歌ども、すみくはへてよとて、置ておきてかへれり

廿五日より廿七日まではこゝかしこに行かひ、あるはたにざくをかき、古今集中のなかの、おぼつかなき所々をたづねられつゝ、日日挽をくらし夜ふくるまで、物廿八日……がたりせるついでに、此くのに

賤山がつの、うすひき、あるは田うゝるをりなどに、うたへるうたとて、かたれるが、いにしへおぼえて、おかしければこゝにしろしつ

麥つきうた

色女よきをなのうすげしやう、はなならばちりてもさかせたいもの、西殿と、ひがしどの

と、あひの垣間杏ねの、からもゝ、紅のまゆをひらいて、これへおちよからもゝ、

田うゑ歌

けふの田の太郎どのは、朝日さすまでかよふた、朝日はさゝばさせ、お帳臺はくらかれ、暗

君が田とわが田はならびあぜ畔ならび、わが田へかゝれ君が田の水

廿八日朝とくよし田をたちて、甲府におもむく、里ばなれまでこれかれおくりす、富士を左に

見つゝ、川口の驛うまやにちかくなれるわたり、廣ひろき野におほきなるいしの、やけたりと見ゆるが、

いとおほかり、こは、三代實錄、清和天皇、貞觀六年、六月十七日、甲斐國言、富士大山、

忽、有ニ暴火ニ燒ニ碎崗巒ニ草木焦熱土礫石流、埋ニ八代郡本栖并剗兩水海ニ云々、とうたへし所ところ

に、川口の海も見ゆれば、其やけをり焼たりし石なるべしとおもへば、見所なきものゝ目も止るこ

川口驛延喜式に見  
えたるは八代郡な  
るを近比都留郡に  
屬せりとそ  
(南都留郡河口湖  
町)  
日本紀略云承平七  
年十一月某日甲斐  
國言駿河國富士山  
神火埋水海

〇とまる

萬葉集高橋蟲麻呂  
詠不盡山  
石花海と名づけて  
有も彼山のつゝめ  
る海そ云々

風土記云淺間神社  
圭田四百五十束三  
代實錄云貞觀七年  
十二月九日辰勅  
甲斐國八代郡立淺  
間明神祠官社東  
鑑云建久五年修覆  
甲斐國八代郡淺間  
神社破壞  
町東八代郡御坂  
あしからの御坂か  
しこみくもり夜の  
あかしといへとか  
ちてつるかも  
あしからのみ坂た  
まはりかへり見す

ちす、ちかごろ、寶永にも焼たれど、そは此わたりならで、駿河國なること、人みなしれる  
事也  
ことなり、川口湖はいとおほきくて、左のかたに見、山にそひてゆく、此わたり湖凡八あり  
といふうち、川口はかくふるきふみにも見え、また此すこし西に、せのうみとてあるは、万葉  
集に、石花海と、よみし所なりとぞ、西をせのころにかりて、西海とかきしを、いまはあやま  
りてにしのうみといへりとなんいへり、万葉にかく其山のつゝめるとよめるも、此うみの事を  
きゝたがへて、ゆくりなくよみし成べし、今も池沼などはいふべくもなき、湖なればうみとい  
はむ事論なし、さるを山上に在と思へるからに、沼地をもうみといへる例

(富士山北側の湖の圖 雪臣)

有などいふは、皆こゝをくはしく見ぬ人のいへるなり、なる澤といへるも山のやくる音にて、  
鳴蛆なりと其國人國仲もいひしなり、今山上に里人御三水とてあるは、さきにいひしごとく、  
四斗樽ばかりのたまり水なり、くはしくはすでにいへり、さて此里にも、淺間御社しづもりま  
して、延喜式に八代郡、淺間神社と出たるは、則此御やしろなるが、近ごろ都留郡に屬しと  
ぞ、右のかたにてちかしと見ゆれば、まうでまほしけれど、いそぐ道なれば、心にまかせず、  
はるかにをがみまつりてすぎぬこゝよりやうくのぼるに例の汗しとくなり、此たむげはみ坂  
とぞいるなる遊行二代眞教上人家集に、甲斐國より相模へこえけるとき三坂といふ山にて、富  
士のたけを見やりて雲よりも高く見えたるふじのねの月にへだゝる影やならむ、と見えたり  
外にも此名はふるきものに見しやうにおぼゆ  
あしがらの神の御坂とよみしはあまた見しやうにおぼゆ、そは異なり

あれはこえゆくあ  
らしをもたし  
後拾遺集能因法師  
しら雲のうへより  
見ゆるあし引の山  
のたかねやみさか  
なるらん

古今集つらゆき  
むすふ手の雲に  
こる山の井のあか  
ても人にわかれぬ  
るかな  
(東八代郡御坂町  
藤野木)

(東八代郡御坂町  
黒駒)

猪名部真根有罪工  
物部刑於野中略

微經復作歌曰農播  
脂刑處止而赦之鮮

古磨能復作歌曰農播  
能致志難磨志柯彼

聖武天皇紀云天平  
三年十二月丙子甲

斐國獻神馬黑身白  
髮尾

風土記云淺間神社  
活目入彦五十狹天

ふじのねをそがひに見つゝ分のぼる山の高ねは禁なりけり、されどたむげまでは、五十町ば  
かりありといへば、たやすからむやは、  
鹽山

しほの山さし出の磯も見まほしみからき旅をもわれはするかな、とくちずさびつゝ、からう  
じてのぼりはてたれば、甲斐がねにつける山々、はるかに見え、こしかたは、富士の嶺雲井  
にそびえていとおもしろし、たむげにちひさき祠あり、天神の社なれば、こゝを天神峠とも、

さと人はいへるとぞ、しばし見させて、坂をひたくだりにくだる、なからばかりとおぼゆる山  
の木陰に、旅人二三人いこひ居たり、そこに清水のあれば、むすび飲に、いとひやゝかなり、  
あかでわかるゝ人はなけれど、雲にゝごるはうへなりけり、午の貝ふくころ、藤の木といふ所  
にいたりて、けさよし田にて、つゝみてもたりし、かれいひとう出て、うゑをたすけ、そこを  
たちて、黒駒といふうまやにいたる、こゝは日本紀雄略紀に、ぬば玉のかひのくる駒とよめる  
歌あれば、いにしへ黒駒たてまつりし所なるべし、猶ゆくに、右のかたに、一宮みちとしるせ  
し石ぶみあれど、例のいそげばえまうでず、これも淺間神社にて、垂仁天皇の御代に祭り給ひ  
しよし、風土記に見えたりとぞ、申時過るころいさはの驛にいたる、石禾と、和名抄にある  
は、いしあはの、しあをつづめて、いさはとはよめるを、今はあやまりて、石和とかきて、か  
なもたがひ、ことわりもあらぬことゝなりになりたり、大かた諸國にかゝる事おほし、なげかはし  
き事になん、鵜飼といへるうたひものにて、人もよくしれる所なりけり、いさハ川をわたり  
て、しばしいこふ、此川もむかしの川すちとはかはれりとぞ、さて上小河原といふ處にゆく、

息  
○待らねど  
吉田  
諸  
下り  
○てのむに  
比とう  
也

甲斐

縮  
事と

○彼鵜飼と

所行



皇八年己亥始被祭  
之石、倭名鈔には  
山梨郡なれと近代  
八代郡に屬せり正  
治年中より永正の  
頃まで武田氏に  
にすまれしなり  
東八代郡石和  
町  
笛吹川一名ねとり  
川といふ子の方より  
西のかたになか  
へり、故の名ともい  
たへり、夢窓國師のう  
浪吹たてゝねとり  
山あらし雪のしら  
なかるゝ笛吹の川

倭名鈔云山梨郡加  
美

賀茂季鷹遺文集

みちのあないをとふに、此すこし<sup>少し</sup>さきに、笛吹川といふ川侍り、そこをわたりて、左のつゝみにそひて、二里ばかりゆく所なりともいひ、また國玉みちと申侍り、そこをこそといへば、又ひとりのおきな、それらの道はちかさはちかけれど、日くれなば、しりたまはぬ野路、いとたとくしく侍るべし、いさゝかとほくともまつ直に甲府に出たまひておはせよといふを、うべとはきけど、日もまだ高し、いでやとて、笛吹川を舟にてわたり、をしへしごとく堤にそひて、一里半ばかりも來けんとおぼゆるころ、はやくれかゝりたり、里人ふたり、鶉かごをかたへにおきてゐたるがしか／＼ととへば、そはけしからぬ道にいましたる物かな、遠なるあとに、わかるゝ道侍るものといふに、むねつぶるれど、いかにせん、かく夜に入ては、いとゞすべなければ、此わたり草の枕をもむすぶべけれど、ねがはくは道しるべしてえさせよ、錢どらせむといふに、なさけあるものとおぼえて、こゝはわれひとりにまかせおきてとくあないて、<sup>將</sup>ゐてまゐらせよ、こうじ給ひぬらんものをなぞいへるさま、<sup>全</sup>またく、錢あたへむといひしにめでたりげにあらねば、すこしこゝろおちぬ、さてひとりのおきな<sup>後</sup>のしりにつきて田のあぜ、はたけの中ともいはずあは、ひえのなかをかきわけつゝ、十四五町ばかりゆけば、すこしまち給へ、こゝに入てしばしやすみ給ひね、こはわが主の家なり、たいをも用意し、ものをもたうべて、<sup>おく</sup>送りまゐらせむといふに、<sup>程</sup>ほどこかからぬ事はしられたり、さてたいといふは、<sup>松明</sup>ついで松をたい松ともいへば、松をはぶきたるなりと、よし田にてもきゝたれば、こゝろえて、所の名をきけば上村といへり、後にみれば<sup>見</sup>山梨郡のうちに加美と和名抄にもみ<sup>也</sup>き所なりけり、さて

○伴氏本、村をさ

夫木集忠みね  
わすれ川またや  
たられすのみお  
ほゆるかな  
同集藤原たかた  
うき人のわすれは  
てなて忘川なにと  
いたえず恋わたる  
こん  
(甲府市内荒川)

古今集、よみ人し  
らす  
ぬは玉のやみのう  
つゝはさたかなる  
ゆめにいゝらま  
さらさりけり

陶潜桃源記云晋大  
元中武陵人捕魚緣  
溪行中路阡陌交通  
鶏犬相聞

あるじ  
家主も出て、ねもごろにあへしらへるさま、かつ家のかまへなどを見るにむらをさと見えたり

しばしいこひてさきのごとく、またしりに立てゆくに、雨は久しうふらねど、このわたりは水

いとおほかりて、あぜみちのこゝかしこに水の出たれば、おきなの背に、をりくおはれなど

しつゝゆく、翁はたいまつふりたてく、しるべせるさま、かけまくもかしこきたとしへなれ

ど、かのいく夜かねつるとどはし給ひし故事も、此國のことなれば、おもひあはせつゝ猶ゆく

に、大なる川あり、忘川とも、荒川ともいふとぞ、字のさまも似たれば、いづれか誤なるべし

そこをもおはれてわたり、岸にあがりてすこしゆけば、木だかき松一本ある所にいたれりける

に、翁のいはくしばしまち給へ、かゝる松は侍らぬ所とおぼゆるを、あやしき所に來れるかな

といへば、またむねつふる此翁もつねに行かひせぬうへに、廿八日の夜なれば、くらさは闇し、

げにやみのうつゝは、夢にもおとれりけり、すべなければ、松がねにこしうちかけて、たばこ

のみつゝ、かうがへたるに里ちかしとおぼえて、犬の聲など聞ゆれば、もろこしの桃源のこゝち

す、とにもかくにも、先かの方にいでゝこそはとて、行いたれりければ、すゞみとれるにや、

里の子二三人たてり、しかしときくに、そは則このさにて、嶋田左衛門どの此二三軒あ

なたに、長屋門かまへたる家なりと、をしふるうれしき、似るものなし、翁にねぎらひあつく

いひて、ぜにあたへてかへしつ、五もとばかりもてまう出たりし、つい松の、残りすくなげな

れば、かへさの道いかならんとおもへど、すべなしや、さて門にいらて、せうこそせさする

に、あるじは二里ばかりあなたに、しぞくの侍るが、きのふそこに出て、いまだかへり侍らず、

こよひも今まで歸り侍らねば、おぼつかなしといひ出したれば、またむねつぶるれど、とまれかくまれ、かく夜に入て、からうじてたどりまゐりにたれば、主いまさずとて、いづこにかはあかし侍らん、こよひ一夜はすのこにもあれ、枕かり侍らむとて、ひたぶるにいへば、さすがにすべなくや思ひけん、しぶく先に給ひねとてすゑて、夜さりのものなど、しぶくい出したるをたうべて後、一間に入て、枕はとれるものから、けふの道、すぐに來てだに十二里ばかりにて、けはしき山路なるを、かくまどひありきぬれば、いくらともはかりがたし、供のをのこもさぞなつかれぬらんとおもひやられ、われもかくはるかなる道を來たるに、湯あみだにせねば、いとゞつかれて、とみにもいをねかぬるに、亥のときばかりにもやと思ふころ、あるじ式敷かへりぬとて、人して、かくはるかなるあがたを、ことさらにおはしたるよろこび、かつよひよりをりあへで、なめけなりかしこまりをも、聞え參らせまほしう侍れど、夜もふけ侍れば、あすたいめ給はらむを、ゆるゝかにいね給ひねといひ出したるに、はじめて心おちゐぬ、こよひかくあるじのかへらざらましかば、此留守あづかれる人々、いぶかしむらむものと、かへすがへすうれし、

廿九日つとめて主出で、はじめてあへるに、刑部國仲はもとより、去年木下彭壽といへるくす師、一とせばかりこゝに侍りしが、季たかゞことは、つばらにうけ給りて、ゆかしうおもひまゐらせつるを、かしこくもとはせ給ふものかな、ゆるゝかにこゝに物したまへ、しほの山、さし出の磯をはじめて、此國に名だゝる所々をも見せまゐらせ、かつうけたまはりあきらめまほし

源氏簞本卷に、  
うちつれきこえた  
まひつゝよるひる  
かくもんをもあそ  
ひをも諸ともにし  
て

事

きこともおほかりとて、ねもごろにまうけなどしたり、やがて此<sup>○家の</sup>やどりの近<sup>ちか</sup>となりなる、甘利  
好道もとひ来て、何くれと物がたりす、此<sup>二人</sup>ふたりは學問をもあそびをも、諸<sup>ところ</sup>ともにして、いと  
よきながらひと見えたり、先いせ物がたりをとう出て、おぼつかなき所々を、ふたりとひき  
つゝ、日くらし夜もふけぬ、<sup>更</sup>

八月朔日けふもきのふのごと、物がたりにて日くれぬ、<sup>○此もの語以下ナシ</sup>

まゝに久しく傳へる中にも、歌にはいとゞしく過にし方てふを、過行とあやまり、きつにはめ  
なむてふをはめなで、はた思ひをつけよほしてかへらんを、かけ歌とおなじく、かへさんとあ  
やまれるたぐひなど、ときつゝ耳をおどろかしつ、かつくたかけの説は、近來もさまぐにい  
へれどあたらず、季鷹が考へあれど、こと長ければこゝにはもらせり

二日けふはつゝじが崎の武田の古城見んとて式穀好道しるべして、甲府のおほき<sup>城</sup>を右に見つゝ  
ゆきて見るに、げにかひの國は山の峽<sup>かひ</sup>なること、いちじるく、山々うちかくみ、たてよこ廿

町ばかり、岡のごとくたひらかにて、本丸ばかりはいしずゑ残り、<sup>石楚</sup>そとくるわはことゞく畑  
となりたり、つらゝおもふに、とほつおや、しらきの三郎義光のあそより、勝頼朝臣<sup>外外</sup>まで、

(甲府市内北部)

およそ四六十年餘、この國に住て、たつとかけり、とらとうそふきたりしいきほひも、時い

たりぬれば、かくこそはと、そゞろにあはれ也、<sup>虎</sup>

石ずゑのあとだに草にうづもれてむなしそよく秋のゆふ風、夢山といへる山、間ちかく見ゆ

れば、かくあれてのち、名づけしにやあらんとおもふに、さにはあらで、いとふるき名所に

(甲府市古府中町)

後<sup>思ふ</sup>思ふ

歌枕名寄夢山よみ  
人しらす  
都人おほつかなき  
にゆめやまをみる  
かひありてゆき歸  
らん

諸門跡系譜云良純  
法親王寛永廿年十  
一月配流于甲斐國  
天目山萬治二年六  
月歸洛  
(甲府市下積翠町  
曹洞宗)

(甲府市古府中町  
曹洞宗)

て、名寄といへるふみにも歌いでたりとぞ、空よくはれたる日はふじもよく見ゆといへど、け

ふはくもりたればかひなし、此岡のうしろの山ぎはに、増福山興因寺といふ寺あり、そは後

陽成帝の八宮、良純法親王、ことありてさすらひのとき、十二年おはしまして、なけばきくきけ

都のこひしきに此さとすぎよ山ほとゝぎす、とよみたまひし所にて、それより此さとは、なか

ずといひつたへたるとなん、こゝをいで、信玄僧正のかりもがりの墓にまうで、後、信虎朝

臣の建給ひし、大泉寺を過、あたご山にちかづくころ、雨ふり出たれば、しばしいこひて、甲

府のまちにいで、伊藤可春といふ人の家に行、此可春は、手ならはすとて子どもあまたつどへ

たれば、かしましきことよなし、主うたをこへば、あるじ歌を

水ぐきのきよきながれをせき入てよもにわかつてる宿ぞこのやど、しばし物語するうち、町の

をさなる、山本昌預がり消息して、我かく來れるをしらせたりとおぼえて、やがてかしこより

人來て、とくわたり給はね、藤井守成も來あひぬ、とくといひおこせたれば、ゆきたるに

、あるじははじめてあへるものから、歌はさるたよりありて、見せしこともあれば、うちかた

らふに、いとむつまじく、守成はひとせわが家にも尋來れりければ、年比の怠りをのべ、ある

じの弟も出て、人々めづらしがりて、酒さかな、くだ物など出してもてなしたり、道すがらよ

めりし歌どもを望ければ、書侍るついでに、

言の葉の花の香とめていはねふみかさなるみちを分つゝぞこし、といへりければ守成

て、人々よめりし歌<sup>○を</sup>ども見せて、しばしかたらひたるに雨もをやみぬれば、またもこそとて、

よし道は家にかへり、式穀あないして、朝氣村てふ所の、馬場徴信といへるくすしも、久しき歌<sup>也</sup>よみなりとき、置き<sup>置</sup>たれば、あぜ道<sup>みち</sup>をたどりて、くれ過る頃<sup>ころ</sup>、とひ行けるにあるじ、

ふみわけて<sup>分て</sup>ふかきなさけの跡見せつ浅ぢが露は雪ならねども、といへりければ、

大かたの野べとおもは<sup>思は</sup>ゞゆふ露に袂そぼちてわけいらめやは、かくてくさぐさ物<sup>分</sup>がたらふに夜<sup>更</sup>ふけぬれば、こよひはこゝに枕をかる、

三日あるじつとめて、花のもとに、えぼうしに笛かきたる繪と、柳のかげに無絃の琴をおきて<sup>置て</sup>

かたへに菊かきたるをもて出て、うたよみて、かきてといへるを、いなひたれど、しひてのぞ

みければ、よみてかきつく其歌<sup>うた</sup>、

櫻花<sup>にほ</sup>匂<sup>ふべ</sup>ふ春方はちりたりと吹笛のねも心あらなん

青柳のいとたえにたる玉琴のあたりに菊の花も匂<sup>ふえ</sup>へり<sup>○有けり</sup>

とばかりあるに、よし道も來れりければ、あるじもともに、けふは酒折のやしうにまうでむと<sup>社</sup>

て、辰のとき<sup>時</sup>ばかり、そこをたちてまうづるみち、國王<sup>くだま</sup>の御社にもまうで給へ、神主磯部正逸

も、此道に心ざし<sup>志</sup>ふかき人に侍れば、たちよりて、もろともにこそはいふに、さらばとてま

うでたるに、大國玉命<sup>の</sup>をまつれりとていかうがうしき宮居<sup>也</sup>なりけり、さて磯部の家に徵信入

て、せうそこすめり、やがて出むかへて、とくより名はき<sup>侍り</sup>はべりぬとて、まらうどおにすゑ

て、しばしかたらふほど、晝のをしものまうけて出したり、御社をくだまの宮といへば、<sup>○れば</sup>たち

古事記倭建命東征  
之段云、出甲斐國  
酒折宮之時歌曰、  
比婆理都久波袁須  
疑豆伊用加泥都那  
留爾其御火燒之老  
人續御歌曰、迦賀那  
倍豆用邇波許々能  
用比邇波登衰加衰  
(甲府市内)

入て、よみてたてまつりし、

廣前<sup>まへ</sup>にみがきてあぶ<sup>たま</sup>玉のみやかけしかゞみのなごりなるらん、玉の光はこよなければに

や、かくれざりける、とばかりありて、此あるじもいざとて、酒折にまうづ、こゝは日本武尊

のかり宮にて、にひばりつくばを過て、<sup>○出て</sup>いく夜か寝つるとよみませしあとにて、世に名たゝる

所なれば、ことにたふとし、やかて神主飯田正房出來りて、拜殿をあけて、<sup>明て</sup>人々をのぼせすゑ

たり、先

千萬のあづまのえみしむけませし神のみいづを仰がざらめや、とて奉りたるに、いざや人々

もめづらしきまどゐなれば、一首づゝよみて奉らむとて、社頭秋風といふ題にて、よめりけれ

ば、

夏過ていく夜かねつる神垣の松にすゞしき秋風の聲 <sup>涼しき</sup> 正逸

木綿 <sup>千早振</sup> ゆふしでのなびくも涼しちはやぶる神のいがきの秋の夕かぜ 式穀

幾秋かもりの松がえ枝ふりて神がき清くそよぐ夕風 徵信

吹となきゆふべの風のしらべさへ秋にすみゆく神垣の松 <sup>行</sup> 正房

手 <sup>もみち</sup> たむくべき紅葉はまだき神垣の御垣の松にかよふ秋かぜ <sup>風</sup> 好道

立ならぶ木々の梢も神びて秋風すゞし坂折の宮

かくて日のくるゝ頃、<sup>比</sup>こゝを出て、徵信式穀にはわかれ、<sup>別れ</sup>正逸の家に、こよひはとまりねと、

わりなくいざなへば、好道とゝもに、<sup>又</sup>また國玉にゆきて、<sup>行て</sup>夜もすがら物がたりし、<sup>語</sup>たにざく懷

## (甲府市和戸町)

古今集に云

かひの國にあひし  
りて待りける人とし  
ふらはんとてまか  
りける道中にて俄  
にやまひをしてい  
まゝとなりけり  
まゝとて京に  
てまかりてはに  
みせよといひて人  
に付待りける  
ありはらのしけ  
はる  
かりそめの行かひ  
ちとそおもひこし  
いまはかきりのか  
とて出なりけり  
大和物語にも此  
とみえたり滋春は  
業平の二男なり  
(甲府市川田町)

契沖説勝地吐懷編に見ゆ

紙など、あるじのこふにまかせて、書ておくりつ

四日朝とく國玉をいで、出けふは指出の磯、石森など見むとて、よし道行道を好あないとしてゆくみ

ちに、和戸といふ所あり、其みちのかたはらに、在原塚といひて、その道すこしこだかく田の中に見

ゆるは、古今集に見えたる、在原滋春朝臣のはかなりけり、○かひの國にあひしりて待りける上ノ注ヲ入ル琵琶塚、琴づかなど名づけしもあ

れば、都よりたづさへ給ひしならむと思ふに、いみじうあはれなり、○也けり其わきに、哀也

かりそめのこと葉言の露を行かひの袖にかけつゝ、忍ぶいにしへ、そこを過行ゆくに、川田に平橋

庵敵水といふ世すて人あり、道のゆく手なれば、立よりたるに、こよなくよろこびて、こはい

ひなど出してもてなしたり、主は俳諧歌をすきて、大かた此國にはくに、はならぶ人なしとぞ、

春秋の花も紅葉もところはにさきにほひたるやどぞこの宿、といへりければ、かへし

春の花秋のすみちの色も香もしかじとぞ思ふ君がことの葉こゝにても、よみおきし歌置しどもを

こふにまかせて、いさか、書ておくりて、それより一町田中村、萩原元克がりゆく、此元克は歌

も萬葉ふりをしたひてよみ、はた此國くにの名勝志といへるふみ三まき、此ころ梓比にありたれば

ゆかしくてとふなりけり、こゝもこよなくよろこびて、さらばまづ日たけぬうちに、さし出の

磯○てナシのあないして見せまゐらせむとて、ひるのをものどく出して、好道先もちともに行て見るに、

おもひしよりも見るはまさりて、いとおもしろき所なりけり、鹽のやまは十四五町ばかりへだ

てゝむかひに見ゆ、そもくこの磯此のことは、難波の契沖阿闍梨の書事おけるものに、甲斐國に

は海なきうへ、鹽山指出磯をよめる古歌、またく海うみをよめるさまなれば、おぼつかなし、越中





云西川鹽出於井永  
康郡塩出於崖峯

古今集

讀人しらす

いほの山さし出の  
か御代をばやちよ  
とそなく

三代實錄貞觀五年  
十二月九日以甲斐  
國大井侯神列官社  
同七年授正五位下  
等刀和名抄に見ゆ  
○伴氏本、等刀村

(山梨市石森町)

○伴氏本、水さう

又

指

鳥

思ひ

今はまた川にさし出の磯千どりふりしむかしのあとをとめけり、かくおもひつゞけて、千鳥  
今はいまも待るやととへば、つねはいとおほく待るなりとて、よし道

うちむれてけふはさし出の磯千どり都のつとの一聲もがな、しばしありて川をちわたりし

指

鳥

也

て、鶴八幡宮を左にをがみて行、このやしろは、延喜式に出たる、大井俣神社なりとぞ、等刀  
此社は

村といふ所にしづもりいませる水宮の神主、堀内茂實もかねてき、およびければ、とふらひた

るに、とく出むかへて、しばしうち物かたらひて、  
もの

故郷にさし出の磯のいそがずば日をかさねてもかたらましを、といふにあるじかへし、  
指

秋あさきさし出の磯の初もみぢおもわすれせでまたもとへ君、此水宮をも、上にいひし大井  
淺き

俣神社なりといへれば、いづれか誠ならむ、さだかにわきがたしと元克かたれり、さて茂實  
也

にはねもごろにかたらひおきて、元克のあとにつきて、石森といふにまう出て見れば、いとた  
置て

かき丘なりけり、此をかは、よもの山をはなる、事はるかにして、野中にあやしきいはほそば  
岡也

たち、くしき石たゝなはりて、誠に名にたがはず、めをおどろかす所なり、まつれる神は、國  
奇

立明神と、熊野明神とをあはせまつれりとぞ、其かたはらに、ちひさきすぬさう出るとて、つ  
〇とナシ

ちをすこしほりて、元克ひろひてえさせつ、かゝる珍らしき所も、世にはありけるよとかへす  
〇おもふにナシ

くおかし、おもふにむかし湖有し時の中嶋成べし、  
いし

あし曳の山路へだてゝあし引の山なす千々の石もりの宮、やゝ日も西にかたぶき、雨も降  
かへ

ぬべきけしきなれば、いそぎて元克が家に、たそかればかりひちがさして歸りぬ、あるじ

古今六帖  
妹が門過行かねつ  
ひちかきのあめも  
ふらならん雨かく  
催馬樂いもか門せ  
なかと行過かね  
てやかかゆかはひ  
ちかさの雨もふら  
なん云々  
源氏物語すまの巻  
にひちかさ雨とか  
降ていとあはたゝ

玉諸神社祭神玉屋  
命式内也今訛て玉  
室といふ

うま人のとひ來まきずばいたづらに庭の眞萩はちりゆかましを、といへりければ、

我

われはもよ友がきえたりから衣きならの宮の友がきえたり、床にふじのかたかけりしをおろして、歌かきてえさせよとあれば、せどう歌を讀て書つく、

旋頭

よみかき

天地の、ひらけし時ゆ、ありきてふ山ぞ、するがなる富士の高ねを、おほにな思ひそ、此山

河

嶺

は、十が七は、この國に入たちたりときけば此くにゝてよめらむには、甲斐なるとこそ、いは

國にて

社

まほしけれといひてわらひつ、こよひ、伊勢人中むら櫛まろとかやいふ人もこゝに來て、海山の物がたりす、この人は旅を家とせるひとにて、みちのくえぞの千しまゝでもあそびしとて、

此

人

いとよくものいひとほれるわかうどなり、けふは此國玉諸神社のほとりなる、水精ほりに行たりとて、あがちておくれり、かの御社のうちには、高さ七尺ばかり、かこみ五尺ばかりなる水

分配

彼

也

精、土より出たるまゝにてありとぞ、

あるじ

五日よべより雨降て、けさも猶くもれりければ、主しひてとむれど、さのみはとて、午のとき過る比こゝを出て、歸る道なかにて、降出たれば、きのふもたちよりし、敲氷がりゆきてしば

ころ

みち

行て

しかたらひて、みのかさなどかりて、好道のしりにつきて行に、例のあぜみちなればようせずば、すべりぬべきをからうじて日くるゝころ、式穀の家に、久しうてかへりたれば、わが家の

比

我

こちせられて、おちあるも、うちつけなるこゝろなりけり、

心

〇かし

六日七日八日は、よし道も夜晝來て、古今集をたゞし、あるは源氏物がたりを講じつゝ、はて

好

ひる

語

〇なければ、故さともおぼつかなく覺ゆればしひていとまこひて出たつに、笛吹川とまりたらむ

郷

〇おぼゆれば九日にしひて

ん

行て

もはかりがたしとて、例の二人おくりす、さて川田までゆきてきくに、はたして、きのふをと

つひの雨に水まさりてけさより舟もかよはずといへば、幸此この所に式敷のしぞくの侍れば、そ

こにやどりて、水のおちんをまち給へといへば、すべなくてゆく行に、いと大なる家おほきにて、故郷さ

とにてあひしれりける、高愛山といふ人も、去年よりこゝにありとて、出むかへて、さまぐ

にもてなしたり、家あるじは、この比上野國此に、湯あみにまかれりとて、弟何がしとかや出て

とばかりあるうち、かの敲氷、くすし玄溟○長合川玄溟など來つどひて、川水のまされるは、我どちの幸

也○御物語なり、こゝに四五日もとゞまり給へ、めづらかなる物がたりをも承り侍らんとて、もてなせる

さま、おもひもかけぬことなり、あるじ方かたより料紙もて出て、例のうたかけといへるに、庭に

は水をせき入いれ、岩いはのたゞずまひなど、おかしき家居なればとりあへず、

千世かけてすむべき宿としられけり庭の池みづ水きしの松がえ、かくて人々のしひてのぞめ

ば、箒木のまきの、雨夜の物がたりをこうじたれば、御いみやには、こよひ鶉つかはせて、見せ

参らせんとて、其そのまうけしたり、日くれはてゝ、いざ○いざやといへば、川べに出て見るに、いとけう

有○火もあり、去年玉川にても見しかど、其そのをりは晝にて、かゞりもなく、つかふさまもたがひて、去

年にくらふればこよなうまさりて、いとおもしろしと思ふもかつはいさは川の名にもよれるな

るべし

底清くきよくてらすかゞりにいざや川いさとこたふるいろくづやある、かゞりを此さと人はい

ともいはずかんばといへれば、いかにと聞きくに、かばもて調じたれば、しかいふとぞ、しばしあ

かんば  
倭名鈔云玉篇云樺  
和名  
加波  
又云加  
仁波  
爲矩一  
萬葉集に櫻皮をか  
にはとよめり

○は

清く

里

りて、川田の家に歸てかへりて、此つどへる人々も、ともにまどゐして、夜ふくるまで○もの語せるついでに此國の…トアリ（異文）枕をとる、

十日空もいとよくはれ、水かさも引たりときけば、旅たびよそひして出るに、笛吹川の岸きしまで、人々おくりせり、ねもころにわかれをつけて、舟にてわたる、

浪波の音も秋のしらべに成にけり波おと笛吹川の水の朝かぜとくちずさひて、石禾のうまやも過行ゆくに、萩原元克が家は左のかたに見えて、いとちかけれど、いそげばえたちよらで、栗原、勝沼な

どいへるをも跡になして、鶴瀬の驛みにいこひて、晝のかれいひたうぶ、勝沼は、勝頼のいくさ○のあそのにまけてうち死しけるところときけば、名にもよらぬものなりけりとふとおぼゆ、こゝはぶだ○あその

天正十年三月十一日  
武田勝頼自殺  
○伴氏本、蒲萄

うをいとおほくつくりて、なりはひとせり、此道のかたへに、柏尾山と頼うちたる寺あり、眞言宗にて、寺を大善寺といふとぞ○といひ元正こは元正天皇の養老二年に、行基僧正いとなみていまの堂は

後宇多天皇の弘安年中たちしまゝなりとぞ、いとふるき文書どもおほかりときけば、見まほしけれど、かりそめに見すべきこと事ともおぼえねば、むなしく過ぬ、さてつる瀬をたちて、駒飼

を過、笹子峠にかゝれるほど、あつさも汗あせも、おほかたおなじものから、水ほしみせぬぞ、さはいへど秋のなかば半のしるしなりける、峠にしばしいこひてゆく驛は、黒野田と書て、くらぬ

だどぞいふ、野をぬとよめることは、日本紀萬葉集などの歌には珍らしからぬことなれど、上つ代のことゝのみおもひけるは、あさかりけり、こゝを過れば、初雁はがり里といふに出、東鑑鏡に波加利といへる所なりとぞ、時しもあれ、里の名いとおもしろければ、

源氏浮舟卷  
里の名をわかしに  
しれは山しろのう  
ちのわたりそいと  
すみうき

いつの世にたれき、そめて名づけ、むあら山中のはつかりのさと、さとの名をわが身にしる  
 人のありげにもなしや、この次の里を、花咲といへるときけば、かならず萩の花なるべしとおも  
 ひつゞけつゝ、山路分ゆくに、日くれにたれば、大月といへる驛にやどらむとてきかするに、い  
 たく荒たる家なるが、ことにきのふの水にて、此さと中にかゝれりけるかけ樋落たれば、湯の  
 まうけもかたしときけば、猿橋まではいと、ほければ、すべなくて、やどれる物から、草のま  
 くらにことならず、あれたる軒端を見ても、里の名はしるかりけり、

故郷の軒もる月は秋ごとに住あらしてぞすみまさりける、と我はやうよみしを、ふと思ひ出  
 されたり、

十一日朝とくやどりをたつに、空くもり雨もいさゝかふれど、おく山のならひ、あしたのほど  
 はかくこそあらめと、みのかさもとらでゆくに、おもひしにたがはず、さるはし犬目など過る  
 ころは、いとよくはれたり、かの來しをりに、つるはぎにてわたりし川も、水かさまざりたり  
 とて、ふねにてわたりて、上野原、諏訪など、もとこし道を過て、小佛たむげにかゝれるはくる  
 しかれど、やゝ故郷のちかづくうれしさになぐさめつゝ、峠に行いたれる比は、申の半なれば、  
 駒木野、關こえむ事、おぼつかなしなどいへど、關のこなたにやどりては、あすとく出たちが  
 たければ、いざ例のますらをごゝろをとて、道づれとなりし人々かたらひて、二里ばかりの坂  
 路を、息もつかで、たゞくだりにくたりて、關路近づきて、道くる人にきけば、たゞいま戸ざ  
 したりといふに、皆人あへなきこゝちす、酉の時をかざるものから、しばしなどつぶやけど、

關市令にも凡關門  
日出開日入閉と見  
えたり

源氏はし姫巻に入  
日をかへすばちこ  
そありけれ  
淮南子覽冥訓云魯  
陽公與韓構難戰酣  
日暮援弋而撓之日  
反三舍  
韓非子內儲篇云  
一韓公与夏戰日欲落  
虞公以劍指日日還不  
落一鳥のそらね史  
記孟嘗君傳にみゆ

軍防令に、凡ッ邊城門は、おそくひらきて、はやくとちよとやらむ見<sup>ん</sup>えたれば、關<sup>守</sup>もりをうらむ  
べくもなし、すべなくて關のこなたに人々やどりとる、入日をまねくことはかたければ、こよ  
ひつとめて、鳥のそら音をこそなど、いひしろひつゝ枕をとる、十二日きのふの山路にこうじ  
たりしけにや、<sup>故</sup>うまいしてあくるもしらぬを、あるじにおどろかさされて、おきて見れば、きの  
ふのごと、空かきくもり雨<sup>降</sup>ふり出たり、けふは山中のならひといはむたのみもなければ、<sup>みのかさ</sup>簑笠  
まうけて、卯のとき過<sup>時</sup>るころ、<sup>比</sup>關をこえ、八王子、日野など過るほど、雨いやましに降たり、  
府中にて、晝のかれいひたうべて、高井戸、四谷にいたれるころくれはてたり、道<sup>みち</sup>づれとなり  
し人々は、甲斐のくにの人なれば、夜ふかく行つかむこと、いかにぞや侍らんとて、四谷にや  
どりたり、わが<sup>我</sup>どちは家路なれば、よしやふけぬともとてわかるゝ比は、やゝ雨もをやみて、  
いぬの時ばかり家にはかへりつきにたり、

賀茂季鷹縣主の富士にのほられしときの日記をうつしをへてかへし侍るとてとありて  
濱田のとの

富士のねによちのほりつゝ見るかことおもほゆるかもうましこのふみ

おなしふみをかへしまゐらすとて

書博士賀茂保考

うへもなき言葉の玉はふしのねの雪の光もそふにや<sup>有</sup>あるらむ

仰嶽の額のことをおもひやりて

かきつけし筆のすかたも富士の嶺のうへなきものとさそあふくらし

春の山ふみ秋の露はらをわけし日記は世にさはなれとこの一卷はかの高嶺を天雲のよそにのみして過めるあたりのなくさめ草にもなすへくつかの木のつき／＼のほり見んひとの道のしをりにもなしてんとめてたゝへてふみやの業かすり巻にすどてひき歌や何や 雪おみにものせよとそゝのかすればをちに足のたくひなる筆をそふるにこそありけれ 菅原雪臣

八葉青蓮三峰白雪上之挿九天下之踏三州者人雖未嘗之觀而皆知其爲富嶽也賀茂季鷹縣主之於國歌也殆有類焉人雖未嘗見而亦皆莫不知其爲名望也縣主弱冠遊于江戸留十九年以善和歌有名于世矣寛政壬子予訪象田禪師於天龍之壽寧精舍坐有一客禪師謂予曰之人以和歌遊于江戸頃日還京予雖未詳姓名而心知爲縣主也既而問之果然爾後得交驩情誼日熟于今二十餘年猶一日也屬者縣主應書肆之請刻其所著富士日記乃使予跋其末予以不文辭不可因一閱之其文辭富瞻考據精該又何待予喋々乎唯此書之行也其名望之彌高謂與青蓮白雪爭光亦奚不可哉謹跋

文化十一年甲戌孟夏瀬尾文拜撰印

研齋書印

文政六年癸未仲夏發行



京都堀川通高辻上

梶川七郎兵衛

同錦小路通室町西

恵比須屋市右衛門

大坂心齋橋筋博勢町南

河内屋茂兵衛

## 解説

富士日記の傳本には伴直方の書寫にかゝる一本が東京教育大學に所藏されてゐて注目される。

この書は縦一七・三糎、横一九・五糎、袋綴楮紙、一面十二行平假名寫で、卷頭右下に伴氏家記の藏印がある。本文は版本と異なる所がある。本文の傍に注した如くである。勿論版本の序跋は此の寫本にはない。特に著しい差異を示せば、

### ①版本

そもく此御社は、延暦七年に、甲斐守紀豐庭あその、宮づくりし給へりとぞ、まつれる神富士淺間は、木ノ花開耶姫命藤武神、諏訪の方は、建御名方命建岡神を、いはへりと、里人のくはしくいへり

この書では、

此御社は上代かみよには鳥井のみありしを武田信虎朝臣はじめて宮づくりし給へりとぞまつれる神

は木花開耶姫命にて日本武尊えみしをむけ給ひしときこの御山をゝがみませし所なるよし

② 版本

五百重山かさなる道をわけ來つゝあふぐこゝろは神ぞしるらむ、塵ひちのつもりてなれる物ぞとはふじのねしらぬ人やいひけむ、とおもひつゞけしを

本書は、

五百重山かさなるみちを分來つゝあふぐこゝろは神ぞしるらん

と思ひつゞけしを（歌一首ナシ）

③ 版本

日の御影、さらにこゝろこと葉もおよびがたし、ちか頃肥後の玉山ときこえしはかせの記に、つばらにのせたりひらき見るべし

本書では、

日の御影さらに心ことばも及びがたければ中々にていはず

④ 廿五日より廿七日まではこゝかしこに行かひ、あるはたにぞくをかき、古今集のなかの、おぼつかなき所々をたづねられつゝ、日をくらし夜ふくるまで、物がたりせるついでに、此くにの賤山がつ、うすひき、あるは田うゝるをりなどに、うたへるうたとて、かたれるが、いにしへおぼへて、おかしければこゝにしるしつ

麥つきうた

色よきをなのうすげしやう、はなならばちりてもさかせたいもの、西殿と、ひがしどのと、あひの垣ねの、からもゝ、紅のまゆをひらいて、これへおちよからもゝ

### 田うゑ歌

けふの田の太郎どのは、朝日さすまでかよふた、朝日はさゝばさせ、お帳臺はくらかれ  
君が田とわが田はならびあぜならび、わが田へかゝれ君が田の水

本書では、甲斐の國の歌を後に述べて、

廿五日より廿七日まではこゝかしこに行かひあるはたんざくをかき古今集の中のおぼつかなき所々をたづねられつゝ日をくらし夜をふかしつ

とあつて、一面四行まであり以下を空白にしてゐる。⑩参照。

### ⑤ 版本に、

萬葉集に、石花海と、よみし所なりとぞ、西をせのこゑにかりて、西海とかきしを、いまはあやまりてにしのうみといへりとなんいへり、萬葉集にかく其山のつゝめるとよめるも、此うみの事をきゝたがへて、ゆくりなくよみし成べし、今も池沼などはいふべくもなき、湖なればうみといはむ事論なし、さるを山上に在と思へるからに、沼地をもうみといへる例有などいふは、皆こゝをくはしく見ぬ人のいへるなり、なる澤といへるも山のやくる音にて、鳴岨なりと其國人國仲もいひしなり、今山上に里人御三水とてあるは、さきにいひしごとく、四斗樽ばかりのたまり水なり、くはしくはすでにいへり

本書では、

萬葉集に石花<sup>せのうみ</sup>海と名づけてあるも此山のとよみし所也とぞ西をせのころにかりて西海とかき

しを今はあやまつてにしのうみといへりとなん

脱文があるかとも思はれるが版本は訂正したものであらう。

⑥ 版本

見えたり、あしがらの神の御坂とよみしはあまた見しやうにおぼゆ、そは異なり

本書では

見え此外にも此名はふるきものに見しやうにおぼゆ

とある。

⑦ 版本

八日朔日けふもきのふのごと、物がたりにて日くれぬ、此もの語いとく誤字おほきを、そがまゝに久しく傳へる中にも、歌にはいとく過にし方てふを、過行とあやまり、きつにはめなむてふをはめなで、はた思ひをつけよほしてかへらんを、かけ歌とおなじく、かへさんとあやまれるたぐひなど、ときつゝ耳おどろかしつ、かつくたかけの説は、近來もさまざまにいへれどあたらず、季鷹が考へあれど、こと長ければこゝにはもらせり

本書では、

八日朔日けふもきのふのごと物語にて日くれぬ

とあり、版本は後の訂正と認むべきであらう。伊勢物語の注釋のことは彼に傍注があるので注意したい。

⑧ 版本

古今集に見えたる、在原滋春朝臣のはかなりけり、琵琶塚、琴づかなど名づけらるもあれば本書では、

古今集にかひの國にあひしりて侍ける人とぶらはんとてまかりける道中にて俄に病をしていまゝと成にければよみて京にもて母に見せよといひて人につけ侍ける歌とてかりそめの行かひとぞ思ひこし今はかぎり門出也けりとよみし在原滋春朝臣のはか也けり其わきに琵琶づか琴づかなど名づけしもあればとある。

⑨ 版本に、

ゆくりなくいはれしものならむ、はたしほうみの如くよみし、古歌も誤なき事いちじるし、すべて國々の名所などあげつろはんには、かゝるたぐひ侍るべきことにこそ、そが中に藻鹽草とて世に行はるし名所の本は、ことにあやまれる事おほし、たとへばならの里をきならのさと、まつち山を亦打山とうめしを、字のまゝにまたうち山と出し、岡の部には、いな岡と出せるを考ふるに萬葉集歌に、つくばねに雪かもふれる否をかもと、よみし詞を岡とおもひて出せるなどは、論にもたらぬことどもなり、さて

本書では、

ゆくりなくいはれしものならんとおぼゆすべて國々の名所などあげつろはんにはかゝるたぐひ侍るべき事にこそ

とある。

⑩ 版本に、

川田の家にかけりて、此つどへる人々も、ともにまどゐして、夜ふくるまで物語しつゝ、枕をとる、十日空もいとよくはれ、

本書では、

川田の家に歸て此つどへる人々もともにまどゐして夜ふくるまでもの語せるついでに此國の賤山がつうすひきあるは田うゝるをりなどにうたへる歌とてかたれるがいにしへおぼえておかしければこゝにしるしつ

うすひき歌

いろよきをなのうすけしやう花ならばちりてもさかせたいもの

むぎつき歌

西殿とひがしとのゝあひの垣根のからもゝ紅のまゆをひらいてこれへおちよからもゝ

田うゑ歌

けふの田の太郎どのは朝日さすまでかよふた朝日はさゝはさせお帳臺はくらかれ君が田と

我田はならびあぜならび我田へかゝれ君が田の水

十日空もいとよくはれ

⑪ 版本に、

あれたる軒端を見ても、里の名はしるかりけり

故郷の軒もる月は秋ごとに住あらしでぞすみまさりける、と我はやうよみしを、  
ふと思ひ出されたり

本書では、

あれたる軒端を見ても里の名はしるかりけり  
とある。

以上によりて、伴直方の書寫本は、季鷹の初稿本に近い形態を傳へたものと認むべきであらう。本書の研究も中田祝夫博士の御助力に負ふものである。

さて富士日記は、賀茂季鷹の旅日記で、寛政二年（一七九〇）七月十八日、江戸の龜島（中央區内）の住居から、四谷、高井戸、石原、府中を経て六所明神に詣り、玉川を渡りて、日野、八王子、小佛峠を越えて、上野原、犬目、鳥澤、猿橋、駒橋を経て吉田に至り、七月二十一日、吉田に宿り、二十二日、淺間神社の祭禮の相撲を見、二十三日は雨が降り、二十四日富士登山をし、二十五日より二十七日まで吉田に滞在、二十八日吉田を發ち、御坂を越えて、石和を過ぎ、笛吹川を渡つて甲府に向ふも途中道に迷ひ、荒川に近き嶋田左衛門式穀の家に辿り著き

て、二十九日より八月一日まで逗留し、八月二日甲府に入り、つつじが崎、武田氏の古城址を望み、大泉寺、信玄の墓に詣うで、國玉の社、酒折の宮に詣り、甲府近郊の人々と相交り、四日、國玉の社を發ちて、さし出の磯を尋ねる途中、川田に俳人敲氷を訪ひ、又近く田中村に萩原元克を訪ふ。石森の丘を眺めて、元克の家に宿り、五日そこを發ちて歸る途中又雨にあひて嶋田左衛門式毅の家に宿り、六七八九日の四日滞在して、古今集や源氏物語の講義をし、十日、そこを發ちて、笹子峠を経て大月に宿り、十一日大月を發ちて、小佛峠を経て駒木野の關に宿り、十二日關を發ちて夜遅く歸宅した時の紀行である。

季鷹がこの富士登山をしたのは、吉田の淺間神社の神主、オサカベ刑部國仲の勧誘によつたのであるが、季鷹はもと江戸遊學前、有栖川宮家の諸大夫であつたことがあり、有栖川職仁親王の御信仰に因んで諏訪明神に詣うでようといふ意圖もあつたのであらう。甲斐國志卷之六十五に、

諏訪明神穴山村稻倉ニ鎮座ス（中略）近世有栖川宮御信仰ニ因テ額字御寄附アリ又堂上地下ノ衆奉納ノ歌數百首ヲ藏ム其内一二ヲ舉ク

として、擧げた歌の中に、賀茂縣主季鷹の歌もあり、

かつきくもあふがざらめや秋の田の八束たりほにしるき神垣とあり、

諏訪明神大八田村（中略）近世有栖川宮ノ御信仰ニ因リテ額字御寄附アリ堂上地下ノ衆奉納ノ歌數百首ヲ藏ム其一二ヲ舉ク



として、又、

良純法親王のそのかみ手ならせ給ひし硯とて森興ぬしの傳へもち玉ふをこたび中務卿の親王の御額賜はせし御いや申に登り玉ふついでにもておはしてそが名をこひ給ふに指出の礪と名付るとて、賀茂季鷹、

鹽の山指出のいそのさして來しかひありけりとしるき此たびとある。同じ歌が、甲斐叢記卷七、中丸舊壘中丸村の條にも、

賀茂季鷹これを視て差出礪と名づくべしとてよめる歌あり

甲斐の國建岡の宮に傳はりける良純親王の手ならさせたまひし硯にさし出の礪と名付るとて

鹽の山さし出の礪のさし出てかひありけりとしるきこのたび

と述べてゐる。右の良純法親王は、日記中にもある如く、後陽成天皇の第八皇子で、甲府の興因寺に流罪せられた方で、季鷹はこの良純親王を慕ひ、その遺蹟を訪ねようといふ至情もあつたに相違ない。

甲斐の國人と季鷹との交情がなつかしい。前述の淺間神社の神主、刑部國仲を始として、二十日の夜に訪ね來た幡野正章、諏訪神社の外宮の神主、佐藤上總、倫丈大徳、二十八日道に迷ひ辿り着いた嶋田左衛門式穀、式穀の近隣に住む甘利好道と伊勢物語の問答をし、八月二日は、式穀好道と同道して武田氏の遺蹟を訪ひ、伊藤可春に立寄り、山本昌預の家に行き、舊知の藤

井守成に會ひ、三日、好道、昌預、醫師馬場徵信と共に酒折の宮を志し、國王の社の神主、磯部正逸を訪ひ、ついで酒折の宮の神主、飯田正房に會ひ、六人が歌を獻じ、四日、甘利好道の案内にて、指出の磯に向ひ、途中、川田の平橋庵敲氷と近く田中村に居住の萩原元克を訪ねて居る。敲氷は安永五年刊の「とをかはず」の著者であり、安永十年二月刊の「新編俳林良材」の編者であり、有名な俳人であつた。萩原元克は、甲斐叢書所收の、甲斐名勝志五卷三冊の著者で、當時甲斐の代表的國學者であつた。その傳記は甲斐叢書の甲斐名勝記の末に述べられてゐる。本居宣長の門に入り、文化二年病歿、年五十七、八代郡都塚村淨泉寺に葬るとある。又その墓誌を載せてゐる。賀茂季鷹がこれらの人々に優遇されてゐることは彼が江戸においてかなり活躍して居たことを示すものである。富士日記の歌が甲斐叢記（大森快庵著）や甲斐國志（松平定館編輯、百二十三卷、文化十一年十一月成る）に引用せられてゐるのは言ふまでもない。

### かりの行かひ（序文）

歌のすがたのちはや振神代より都がの木のいや繼々にかはれるなして文のさまもかた糸のよりくうつれりけらしそが中にもいたくゞだりての世にはからぶみのこはくしき詞など多くまじへつゝ書めればあがすべら御國の上つ代のふみのすがたは名殘もなくなん成にたりせうそこ文もおなじき物から中比よりこなたにはいたくも見えきこえずなむあるさるをちか

き世にあしがちる難波の契沖あざり水鳥のかもの眞淵の翁などつき／＼にあら小田のあらず  
 きかへし／＼にたれば我も人も千せの後にうまれて千年の古をあふぐは樂しからざらんやこ  
 へにおなじ心に上つ代しのべる拜志茂樹いへらくうひ學の山口にすべきせうそこ文や侍る我  
 ども見もし見せもせましとなんいでざりや季鷹らもはやうしか思ひて源氏うつほの物語を始  
 て見るごとにつまじるし／＼置にたればかき出さばやと思ひ給ふる物からこよろぎのいそぐ事  
 のみつどひてむなしく年なみをなんこえにきのかの山の／＼どやかなるをり見出て社はとか  
 たるにそは後瀬の山の後にし給ひていかこの崎のいかでとくとこふにさらば我こゝにかへり  
 しをりあづまの友がき橘千蔭村田春海などおくれりしふみどものかたへのさうじにおしにた  
 るを見給へはた眞ぶちの翁のふみかつ我はやう書かはせしも物のはしにしるし置たれば今た  
 らいまもといふに悦てやがて寫してふどころにして其日は歸て五六日して柴門たゝきて此比  
 のふみを友どちに見せ待ればおなじくは梓にのぼせてむさし野のひろらかに耳梨山のみづづ  
 書するをみな手までも見せ待らば上つ代しのふたづきに待らんとまをすをさゆりばのゆるい  
 給はんかしと菅の根のねもごろにこへるを印南野のいなひかねてなんそも／＼此行かひのふ  
 みどもはさる心しらひもなく秋の田のかりそめにかきかはしたる多かめればうど濱のうと  
 きわたりにみえしらへん事つゞきの里のつゝましき物からいかほの浪のいかゞせんとなむ

享和元年四月廿日あまり二日賀茂季鷹しるす

刊記

享和二年首夏發行

皇都錦小路通室町四

書肆 城戸市右衛門

同 新町通御池南

林 安五郎

雅言集覽序（文化九年頃か）

言たまのさきはふ大御國にしもうまれて其ことのもとをしらずかなの亂れにたるをもわきまへす物かき調よむ人中むかしよりむねと有人とちにすら多かりしをもいとせあまりをちつ方難波の契沖あさり乃樂の葉の名におふ萬葉のあら山中にわけ入て宮木くぬ木のもとうちきり末打たちて大みあらかをも造るへく賤かふせ屋をも建つへくなしゝを山口にして神風の伊勢の宣長千はやふる我賀茂の眞淵のをちなど春の田のすきゝに眞がなもて削らひとくさもてみがきなどせしは古をあふく人どちのこよなきさちならずやされど其宮木は山高く道さかしくてうひ學の人のたは安く得がてにすなるを此頃大江戸なる六樹園の主その木の柱にすべくけたにすべきを木だくみのすみ壺の墨を竹筆にうるはしてしるせらんごとく色葉のかんな

もてついで簡雅言集覽となむ名付て木にゑらせしは兒處女子までもとみに見出て石上ふるき歌をも言をもしりふん屋をも造らしめむ爲ならずや抑此翁のされ歌に名とゞろける事今天の下に誰かはしらざらんされどたゞにされ歌にのみ名あると知て言さへくから書をひろく見そらみつ倭の道々しきふみらを始めてふみてふ書をくまなく見あきらめられしは此書を見て知人もあらんかし季鷹彼あたりに住しはまだいとわかゝりしか此翁のさえの廣かる事ははやう知にたれどかく海山をとほくへだてぬればおのづから雲井のよそに過し來けるに此頃難波人梅干まろがかしこに下りて歸りのぼれる便に此書を見せてそがはしに只一言添よとねもごろにこはるゝを野中の清水ぬるからずもとの心をふかく識ぬればいなひがてに老のめに目かねをそへて燈のもとに筆をとれるになん

賀 茂 季 藏

北邊歌文集（富士谷成章全集所收）序文

四の海なみおたしき大御世の幸とて萬道古にかへる中にしも哥道盛なること誠に古にも恥べからずなんされば檣葉の名にしおふ林に分入ぬ人なく言玉のさきはふ大御國ふりをあふがぬくまもあらずなんそが中に富士谷成章ぬしは我いとなき比常にむつまじう語らひしかをさな心にも後世のえならす長閑しなゝどの姿詞言葉好しからず思たりしを其比は都に同志の人な

ければ悦簡常にむつびかはしけるに万葉集本として古今集を深く心にしめ躬恒貫之の大人たちを社はと常に語はち（たちを社はと常に）れしを思へば其比は古學の人都に今の如はあらざりし故なるへし抑此うしの早う後世のすがたはるなうさゝやか成をしへ共は耳ふたぎて哥しらべ高かる事はた倭たましひはさる物にて諸こしのさえさへ有し事は兄の皆川の大人と一夜百首の詩哥をよみもし作りもせられしに皆川大人は詩作りをへていかにとゝはれしかは詞はとく詠はてつから哥を添はやと思ていて夫も大方に出来にたりと答へられしかはこよなう驚かれしてふ事其比世人かたらひ傳へ簡めてあへりきさればをりにふれよみ出られし哥共のいたつらにくちはてなをゝしみて其子の御杖ぬし花くはし櫻木にのほせらるゝに淺香山の淺からぬえにしあれは一言はし書せよとねもごろにこはるゝを深きえにし忘かたくて八十に餘れる老が眼の涙をしほり簡筆をとりてたゞうち思ふまゝをしるせる也

賀 茂 季 鷹

（東京教育大學藏自筆文による）

十六夜日記殘月抄（序文）（自筆版下）

古にいはすやひきく學ひて高きに到ると此もゝ歳はかりをちつ方石上ふる言學ひの道ひらけしより乃樂の葉の名におふ宮の古言をはしめ古をしも手にとれらんか如く詞の林にあそふ人久方の天の下にみちたゝはせるは我も人もかくおたしき大御代にあへるさちならぬかはされ

は四方八方にみちたらへる中には彼ひきゝ、桮を分すたゝちに天雲棚ひく高嶺に登れるもあれ  
はあるはさかしき岩かとに足をそこなひあるはふかき谷におち入てよわこししたゝかに打な  
とすめるも世に多かりそは古の方とて後の世のくすしの方をひきく見下しつゝ高くとゝまれ  
るをはつかに見きゝおほえて薬をあたふるにたちまちに天つちのなせる命をしもあやまて  
にひとしきものから此道の毒はもたえ苦しむ事しなければさても有ぬへけれと其まことは  
一なれは古学せん人はふかく心を定めて歌をもふみをもよみ書へき事に社抑こたひ吾友高田  
與清ぬし四條局か書し十六夜日記を初學の爲にとて梶の音のつはらにときて梓にのほせらる  
ゝを見るに彼わろものにはこよなうたかひて心をひきくししかも上つ代の書どもをひきてし  
るしあかされしは我常に思ふにことならねは端書をとの給ふをいさゝ村竹聊印南野ゝいなひ  
すて一言しるし侍るとて

ほそ河の細き流も末終に海となりなむ水くきそこれ

賀茂季鷹

(文政七年二月刊)